



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（76-90）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2018, 16, p. 1-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105985
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

**アルムファッダリーヤート試訳
(76-90)**

池田 修

al-Mufaḍḍaliyyāt Translated (76-90)

Osamu IKEDA

抜 刷

「アラブ・イスラム研究」第16号 2018年

Journal of Arabic and Islamic Studies

مجلة الدراسات العربية والإسلامية

Vol. 16, 2018

アルムファッダリーヤート試訳
—— (76) アルムサッキブ・アルアブディー ——
الْمُثَقِّبُ الْعَبْدِيُّ

池田 修*

まえがき

この詩人はすでに No. 28 で登場している。本詩の11行には、ラクダの乗り籠で旅をする年若い乙女らが少女用のベールに覗き穴を開けている (*thaqqibna l-waṣāwiṣa lil-uyūni*) と、詩人の通り名アルムサッキブ (*al-muthaqqib*、穴を開ける者) の由来を表す文句がある。また41行には、詩人がアムル (Amr) の名を上げており、解説では、アムルはラフム朝のアムル・ブヌ・ヒンド王 (在位554-570) のこととしている。しかし、アルアスマイーは詩人の言葉づかいから見て王に当てたものではないと、この解釈を否定している。

No 28, 14行では、同じ詩人がこの王より後のアンヌウマーン・アブー・カーブース王 (AD 580 または 585-602 または 607) にへつらっている。このように見えてくると詩人はアムル王より後の世代の人物であり、この詩がアムル王にあてたものとされている点には疑問が残る。

この詩では1-4行で恋人との別れを惜しむ心情、5-8行でラクダに乗った女性の旅の模様、13-39行で自分の雌ラクダの描写、40-40行でアムルへの訴え、43-44行で運命の不可視なこと、などを述べている。最後の2行が主題と思われる。ワーフィル調、45行。

(76) テキスト

وَقَالَ الْمُثَقِّبُ الْعَبْدِيُّ

- | | |
|---|---|
| وَمَنْعُكَ مَا سَأَلْتُ كَأَنْ تَبِينِي | ١- أَفَاطِمَ قَبْلَ بَيْنِكَ مَتَّعِينِي |
| تَمُرُّ بِهَا رِيَاخُ الصَّيْفِ دُونِي | ٢- فَلَا تَعِدِي مَوَاعِدَ كَاذِبَاتٍ |
| خِلَافِكَ مَا وَصَلْتُ بِهَا يَمِينِي | ٣- فَإِنِّي لَوْ تُخَالِفُنِي شِمَالِي |
| كَذَلِكَ أَجْتَوِي مَنْ يَجْتَوِينِي | ٤- إِذَا لَقَطَعْتُهَا وَلَقُلْتُ بَيْنِي |
| فَمَا خَرَجْتُ مِنَ الْوَادِي لِحِينِ | ٥- لِمَنْ طُعْنُ تَطَالِغٍ مِنْ ضُبَيْبٍ |

* 大阪外国語大学 名誉教授

〔池田修先生のご意向により、本号掲載の「試訳」校正は高階が担当しました。〕

وَنَكَّبْنَ الذَّرَانِحَ بِالْيَمِينِ
كَأَنَّ حُمُولَهُنَّ عَلَى سَفِينِ
عُرَاضَاتِ الْأَبَاهِرِ وَالشُّؤُونِ
قَوَاتِلُ كُلِّ أَشْجَعِ مُسْتَكِينِ
تَنُوشُ الدَّانِيَاتِ مِنَ الْعُصُونِ
وَتَقْبَنُ الْوَصَاوِصَ لِلْعُيُونِ
طَوِيلَاتِ الدَّوَائِبِ وَالْقُرُونِ
مِنَ الْأَجْيَادِ وَالْبَشَرِ الْمَصُونِ
كَلُونِ الْعَاجِ لَيْسَ بِذِي عُضُونِ
يَعِزُّ عَلَيْهِ لَمْ يَرْجِعْ بِحِينِ
تَبْدُ الْمُرْشَقَاتِ مِنَ الْقُطِينِ
فَلَمْ يَرْجِعْنَ قَائِلَةً لِحِينِ
لَهَا جِرَّةٌ نَصَبْتُ لَهَا جَبِينِي
كَذَاكَ أَكُونُ مُصْحَبَتِي قُرُونِي
عُذَافِرَةٌ كَمِطْرَقَةِ الثُّيُونِ
يُبَارِيهَا وَيَأْخُذُ بِالْوُضِيِّينِ
سَوَادِي الرِّضِيحَ مَعَ اللَّحِينِ
أَمَامَ الزُّورِ مِنْ قَلْقِ الْوُضِيِّينِ
مُعَرَّسُ بَاكِراتِ الْوُرْدِ جُؤُونِ
قَوَى التَّسْعِ الْمُحَرَّمِ ذِي الْمُثُونِ
لَهُ صَوْتُ أَبْحُ مِنْ الرِّينِ
قِذَافُ غَرِيبَةٍ بِيَدِي مُعِينِ
خَوَايَةِ فَرْجِ مِفْلَاتِ دَهِينِ
كَتَغْرِيدِ الْحَمَامِ عَلَى الْوُكُونِ
لِعَادَتِهَا مِنَ السَّدَفِ الْمُبِينِ
عَلَى مَعَزَائِهَا وَعَلَى الْوَجِينِ
عَلَى قَرَوَاءِ مَاهِرَةٍ دَهِينِ
عَوَارِبُ كُلِّ ذِي حَدَبٍ بَطِينِ
تَجَاسَرُ بِالنُّخَاعِ وَبِالْوَتِينِ
تَأْوُهُ آهَةُ الرَّجُلِ الْحَزِينِ
أَهَذَا دِينُهُ أَبَدًا وَدِينِي

٦- مَرَزَنَ عَلَى شَرَافِ فَذَاتِ رَجُلٍ
٧- وَهَنَّ كَذَاكَ حِينَ قَطَعْنَ فَلَجًا
٨- يُشَبِّهَنَّ السَّفِينِ وَهَنَّ بُحْتِ
٩- وَهَنَّ عَلَى الرَّجَائِزِ وَاكْنَاتِ
١٠- كَغَزْلَانٍ خَذَلْنَ بِذَاتِ ضَالِ
١١- ظَهَرْنَ بِكِلَّةٍ وَسَدَلْنَ أُخْرَى
١٢- وَهَنَّ عَلَى الظَّلَامِ مُطَلَّبَاتِ
١٣- أَرَيْنَ مَحَاسِنًا وَكَنَّ أُخْرَى
١٤- وَمِنْ ذَهَبٍ يُلُوحُ عَلَى تَرْبِ
١٥- إِذَا مَا فُتِنَهُ يَوْمًا بِرَهْنِ
١٦- بِتَلْهِيَةِ أَرِيشُ بِهَا سِهَامِي
١٧- عَلَوْنَ رُبَاوَةً وَهَبَطْنَ غَيْيًا
١٨- فَقُلْتُ لِبَعْضِهِنَّ، وَشَدَّ رَحْلِي
١٩- لَعَلَّكَ إِنْ صَرَمْتَ الْحَبْلَ مِنِّي
٢٠- فَسَلِّ إِلَهُمَّ عَنْكَ بِذَاتِ لَوْثِ
٢١- بِصَادِقَةِ الْوَجِيفِ كَأَنَّ هَرًّا
٢٢- كَسَاهَا تَامِكًا قَرْدًا عَلَيْهَا
٢٣- إِذَا فَلَقْتُ أَشَدُّ لَهَا سِنَافًا
٢٤- كَأَنَّ مَوَاقِعَ التَّفَنَاتِ مِنْهَا
٢٥- يَجُذُّ تَنْفُسُ الصُّعْدَاءِ مِنْهَا
٢٦- تَصُبُّ الْحَالِيَيْنِ بِمُشَقَّتِ
٢٧- كَأَنَّ نَفْيَ مَا تَنْفَى يَدَاهَا
٢٨- تَسُدُّ بِدَائِمِ الْخَطَرَانِ جَثْلِ
٢٩- وَتَسْمَعُ لِلذَّبَابِ إِذَا تَغَنَّى
٣٠- فَالْقَيْتُ الزَّمَامَ لَهَا فَنَامَتْ
٣١- كَأَنَّ مَنَاخَهَا مُلْقَى لِحَامِ
٣٢- كَأَنَّ الْكُورَ وَالْأَنْسَاعَ مِنْهَا
٣٣- يَشُقُّ الْمَاءَ جُؤْجُؤَهَا وَيَعْلُو
٣٤- غَدَتْ قَوْدَاءَ مُنْشَقًا نَسَاهَا
٣٥- إِذَا مَا فُتِمَتْ أَرْحَلُهَا بَلِيلِ
٣٦- تَقُولُ إِذَا ذَرَأَتْ لَهَا وَضِينِي

- ٣٧- أَكُلَ الدَّهْرَ حَلًّا وَارْتَحَالَ
 ٣٨- فَأَبْقَى بَاطِلِي وَالْجُدَّ مِنْهَا
 ٣٩- ثَنَيْتُ زِمَامَهَا وَوَضَعْتُ رَحْلِي
 ٤٠- فَرَحْتُ بِهَا تُعَارِضُ مُسْبِطًا
 ٤١- إِلَى عَمْرٍو وَمِنْ عَمْرٍو أَتَيْتَنِي
 ٤٢- فَإِمَّا أَنْ تَكُونَ أَخِي بِحَقِّ
 ٤٣- وَإِلَّا فَاطْرَحْنِي وَاتَّخِذْنِي
 ٤٤- وَمَا أَدْرِي إِذَا يَمَمْتُ أَمْرًا
 ٤٥- أَلْخَيْرُ الَّذِي أَنَا أَبْتَغِيهِ
 أَمَا يُبْقَى عَلَيَّ وَمَا يَقِينِي
 كَدُّكَانِ الدَّرَابِنَةِ الْمُطِينِ
 وَتُمْرُقَةً رَفَذْتُ بِهَا يَمِينِي
 عَلَى صَحْصَاحِهِ وَعَلَى الْمُثُونِ
 أَخِي النَّجْدَاتِ وَالْحِلْمِ الرَّصِينِ
 فَأَعْرِفَ مِنْكَ غَثِي أَوْ سَمِينِي
 عَدُوًّا أَتَّقِيكَ وَتَتَّقِينِي
 أُرِيدُ الْخَيْرَ أَيُّهُمَا يَلِينِي
 أَمْ الشَّرُّ الَّذِي هُوَ يَبْتَغِينِي

(76) 訳

- 1- ファーティマよ、旅立ちの前に私を楽しませてくれ。私の頼みを拒めば、まるで、そなたは私と離別したも同然だ¹⁾。
- 2- 私に偽りの約束をしてはならぬ。そのような約束は夏風が私のもとから遠くへ吹き去らすであろう。
- 3- そなたが違約したように私の左手が私に違約すれば、右手を左手に合わせはしないであろう。
- 4- すなわち、私は左手を切り離し、“離れ行け”と告げるであろう。このように、私は私を嫌う者は嫌うのである。
- 5- ドバイブへと登って行く、女人らが乗っているラクダの籠は誰のものか。一行はゆっくり進み、いずれ、その溪谷から姿を現すであろう²⁾。
- 6- 彼女らはシャラーフ、次いでザート・リジュールの上の方を通り、アッザラーニフのところで右に折れて行った³⁾。
- 7- 彼女らがファルジュを横断するときの様子はこのよう⁴⁾、ラクダの背に寄せられた女人らの籠は、まるで船に寄せられているかのようであった。
- 8- それらはまことに船に似ていた。(婦人らが乗っているラクダは、バクトリヤ産の)ふたこぶラクダで背と顔の幅は広い。
- 9- 女人らは乗り籠に巢窠もりするように座っているが、彼女らにへりくだっていても極めて勇敢な男達をことごとく悩殺する。
- 10- 彼女らは群れから遅れ、ハマ囊の木が生えている辺りで⁵⁾、近くの枝を引き寄せる

1) 夏風が吹き始めると各部族は各自の夏営地へと去る。これが、知り合った男女の別れとなる。夏風は砂嵐となり、人々を苦しめる。この別れと苦痛を重ねていると思われる。
 2) mā *kharajat* の mā は関係代名詞または *kamā* の代用との二種の説明がなされている。ドバイブ (Dubayb) は地名で、スパイブ (Subayb) とする伝承もある。
 3) *Sharāf*, *Dhāt Rijl*, *al-Dharānīh* および5行の *Dubayb* はいずれもアルバハラインの低地にある地名で、これらを経由してアルヤマーマの高地へと夏営地を求めて移動していた。
 4) ファルジュ (Falj) には溪谷の意味があるが、ここでは地名とした。
 5) ザート・ダール (*dhāt dāl*) はハマ囊の木が生えているところ、と訳したが、地名かもしれない。

カモシカのようにだ。

- 11- 彼女らは乗り籠の上に薄い覆い布をかけたり、別の布をかけ（外からみえないようにし）ていたが、（年若く）少女用のベールに（外の様子が見えるようにと）穴を開けていた⁶⁾。
- 12- 彼女らは（我々に）よそよそしかったが、我々が求めてやまぬ標的であった。彼女らの前髪や髪房は長かった。
- 13- 彼女らは白いうなじや良く手入れをした肌などの一部の魅力のある部分を見せ、他の部分は隠していた。
- 14- また、胸の上部に伺えるのは黄金（のような魅力的な肌）、象牙のような色合いをしており、そこには皺一つない。
- 15- いつの日か、彼女らが愛の奴隷となった男の心を質草として去ってしまうと、それが元に戻ることはまず望めない。
- 16- 私は恋する彼女を楽しませるために、私の矢に羽根をつけた。彼女は、首を伸ばしてあたりを眺めようとしている群れのガゼル（のような乙女らの中で）誰よりも優れて美しかった⁷⁾。
- 17- 彼女らは丘の上に上り、次いで、低地へと降り姿が見えなくなったが、（ラクダから降りて）ほとんど昼寝をしようとしなかった。
- 18- 私は彼女らの一人に言った、—— 私の鞍は正午の陽射しの中ラクダに強く縛られており、強い陽射しが額を当たったままであったが ——
- 19- “もし、そなたが私との絆を断つのであれば、私は私自身を頼りとする（そなたとの絆を断つ）ことであろう” と。
- 20- よって、彼女への気づかいを忘れ、頑強この上なく、鍛冶屋のハンマーのように強い雌ラクダに乗る（旅に出る）が良い。
- 21- ラクダは早駆けするのに頼れるもので、まるで、猫がラクダと競い⁸⁾、腹帯のあたりを引っ掻く（逃れようとして急いでいる）かのようであった。
- 22- ラクダはサワード地のナツメヤシの種を砕き、これに練りつぶした木の葉を混ぜた餌で育てられ、背中のこぶが高く盛り上がり、もつれた毛が密生していた。
- 23- ラクダの装具が緩むときには⁹⁾、私は腹帯のたるみを直すため胸元の皮ひもを引き締めてやる。
- 24- ラクダが（休息するために）うずくまったときに地面に残る四肢と胸のこぶの跡は、早朝水場に飛来する黒い砂ライチョウが（休息のために）掘った窪みのようだ。
- 25- ラクダが深く息を吸い込んで胸を膨らますと、なめしたてで強靱だが、まだ、しなやかになっていない皮の網紐がはち切られる¹⁰⁾。
- 26- ラクダは（疾駆するとき）へその両側の血管に足が蹴り上げる小石を当てる。（当たって落ちる小石は（弓のつるの）うなり声よりも耳障りな音をたてる。
- 27- ラクダの前脚が巻き上げた小石は、他人の水槽に水を飲もうと近寄った見かけぬラ

6) 詩人の異称アルムサッキブ (al-Muthaqqib) はこの一行に由来する。

7) bi-hā については la-hā の伝承のほうが適当と思い、これに従った。

8) ラクダと猫の関係については、同じ詩人が No. 28, 10行でも述べている。

9) ラクダが痩せると装具が後ろにずれるので、胸元の帯に皮ひも (sināf) を結び、ずれないようにする。

10) ラクダの肺の強さを述べたもの。

- クダを追い払う、雇われ牧夫が両手に持っている石つぶてのようであった。
- 28- ラクダは長い毛が密生していて、常に動き回る尾で子をはらんでいない子宮の入り口を塞ぐが、(乳首からは)ほとんどミルクを出したことがない。
- 29- あなたはハエが鳴く音を聞くであろう。その鳴き声は鳩が巣の上で悲しげに鳴いているようだ¹¹⁾。
- 30- 私が手綱をラクダに預けて降りると、ラクダはいつもの習慣どおりに夜明けの光が射し始める頃、眠りについた¹²⁾。
- 31- ラクダがひざまずいた地面は小石が多くでこぼこしており、まるで、轡を投げかけた場所のようであった¹³⁾。
- 32- ラクダの鞍と腹帯のひもは、海に浮かぶ油が塗られた長い船に乗せられているようであった¹⁴⁾。
- 33- 船は船首で水面を割りながら広大な海のすべての波頭の上に乗って進む。
- 34- ラクダは成長して首が長く伸び、太って大腿部の肉がひび割れ静脈がみえるようになったが、脊髄と大動脈は頑強で大胆に振舞う。
- 35- 私が夜、起きてラクダに鞍を乗せると、ラクダは悲しんでいる男のように“ああ”と鳴く。
- 36- 私が鞍を縛り付ける腹帯をあてがうと、ラクダは“これがいつまでも続けられる彼の慣わしであり、私の慣わしか？”
- 37- いつも鞍をはずしたり、取り付けたりするだけか。私を哀れと思い、守ってやろうとしないのか？”と言う。
- 38- 私は酒色を求めてラクダを乗り回し、懸命に駆けさせたが、ラクダは泥で固められた門番椅子のよう(に大きく頑強)であった。
- 39- 私はラクダの手綱をつかみ、鞍をすえ、枕布団を敷いて右手をその上に乗せて、
- 40- 夜、ラクダに乗って出発した。ラクダは延々と伸びた道に沿って進んだが、地面は平坦なところも、でこぼこのところもあった。
- 41- アムルのもとへ(旅立とう)。アムルのもとから彼女(アムルの母)が私のところにやって来た。彼(アムル)は多様な支援者であり、完成された寛容者である¹⁵⁾。
- 42- 君がまことにわが兄弟であるのか。君次第で私がやせるのか太るのかを知ることになろう¹⁶⁾。
- 43- さもなければ、私を追い出し、敵と見なすが良い。私は君からわが身を守り、君は私から身を守ることになろう。
- 44- 私には何かをしようとしても、その結果がどうなるかは分からない。善行を望んでも、善悪いずれが私に近寄るであろうか。

11) アルアスマイーはハエの鳴き声をラクダが犬歯をきしらせる音、または、草花に群れるハエやミツバチの鳴き声と解している。アンタラのムアッラカ18行には、花園でハエが飛び交い、音を立てるさまが述べられている。

12) 同じ詩人による No. 28, 8行の表現と良く似ている。

13) ラクダが長い首を投げ出して眠る姿を、投げ出された手綱にたとえているものであろう。

14) ラクダがひざまずいている姿を船にたとえたもの。

15) 「まえがき」に触れたが、ここでのアムルはアムル・ブヌ・ヒンドとされているが、アルアスマイーはこれを否定している。ʾatatnī (彼女は私のところに来た)の彼女とは、王の母と解説されている。つまり、キンダ王家出のヒンド・ビント・アルハーリス (Hind bint al-Hārith)。

16) 私に益するか、益しないかを知るの意。

45- すなわち、私が求める善であるのか、それとも私を求める悪であるのか。

—— (77) アルムサッキブ・アルアブディー ——

الْمُثَقِّبُ الْعَبْدِيُّ

まえがき

この詩は二つの部分よりなっており、もともと異なる詩が合体したか、一つの詩の前半と後半を結ぶ中間部分が脱落したものか、のいずれかであろう。すなわち、1-12行は知恵 (ḥikma) とか倫理 (khulq) を内容としている。後半はルカイズ・ブヌ・アブド・アルカイス (Lukayz bn °Abd al-Qays) の族長であったハーリド・ブヌ・アンマール・ブヌ・アルハーリス (Khālīd b. °Anmār bn al-Hārith) への賛辞に当てられている。言い伝えによれば、アルムサッキブにはシャアス (Sha's) という甥がいた。彼はアルムマザク・アルアブディー (al-Mumazzaq al-°Abdī) という名で知られている詩人であり、本詩集にも No. 80, 81 および 130 (Lyall 校訂本補遺4) に彼の詩が載っている。

シャアスはある王に捕らえられていたが、族長ハーリド・ブヌ・アンマールのとりなしで解放された。アルムサッキブはこの詩の後半で、とりなしたハーリドを褒めている。

ところで、この詩の作者については異論が伝えられている。アルマルズーキーの注釈書には、本詩の2, 3, 7 および 18行は載せられていない。また、1, 4, 5, 6 および 8, 9, 10, 11, 12行については、本詩集の編者であるアルムファッダールがアルハジュハージュ・アルアブディー (al-Hajhāj al-°Abdī) の作である、としている。

以上を除くと al-Muthaqqib は13-17行までの5行だけの作者ということになる。しかし、アルハジュハージュという人物についての資料が全く見当たらず、この言い伝えを確認することはできない。Lyall 校訂本では16行となっているが、カイロ版で7, 18の 2行を追加したので、ラマル調、18行となっている。

(77) テキスト

وَقَالَ الْمُثَقِّبُ أَيْضًا

- | | |
|---|--|
| ١- لَا تَقُولَنَّ إِذَا مَا لَمْ تُرِدْ | أَنْ تُبَيِّنَ الْوَعْدَ فِي شَيْءٍ نَعَمْ |
| ٢- حَسَنُ قَوْلٍ نَعَمْ مِنْ بَعْدِ لَا | وَقَبِيحُ قَوْلٍ لَا بَعْدَ نَعَمْ |
| ٣- إِنَّ لَا بَعْدَ نَعَمْ فَاحِشَةٌ | فَبَلَا فَابْدَأْ إِذَا خِفْتَ النَّدَمَ |
| ٤- فَإِذَا قُلْتَ نَعَمْ فَأَصْبِرْ لَهَا | بِنَجَاحِ الْقَوْلِ، إِنَّ الْخُلْفَ دَمٌ |
| ٥- وَاعْلَمْ أَنَّ الدَّمَ نَقْصٌ لِلْفَتَى | وَمَتَى لَا يَتَّقِ الدَّمَ يُدَمُّ |

- ٦- أَكْرِمُ الْجَارَ وَأَرْعَى حَقَّهُ
 ٧- أَنَا بَيْتِي مِنْ مَعَدٍّ فِي الدُّرَى
 ٨- لَا تَرَانِي رَاتِعًا فِي مَجْلِسٍ
 ٩- إِنَّ شَرَّ النَّاسِ مَنْ يَكْشُرُ لِي
 ١٠- وَكَلَامِ سَيِّءٍ قَدْ وَقُرْتُ
 ١١- فَتَعَزَّيْتُ خَشَاءً أَنْ يَرَى
 ١٢- وَلِبَعْضِ الصَّفْحِ وَالْإِعْزَاضِ عَنْ
 ١٣- إِنَّمَا جَادَ بِشَأْسٍ خَالِدٌ
 ١٤- مِنْ مَنَائَا يَتَخَاسِنُ بِهِ
 ١٥- مُتَرَعُّ الْجَفْنَةِ رِنْعَى النَّدَى
 ١٦- يَجْعَلُ الْهَنَاءَ عَطَايَا جَمَّةً
 ١٧- لَا يُبَالِي طَيِّبُ النَّفْسِ بِهِ
 ١٨- أَجْعَلُ الْمَالَ لِعِرْضِي جُنَّةً
- إِنَّ عِرْفَانَ الْفَتَى الْحَقَّ كَرَمٌ
 وَلِي الْهَامَةُ وَالْفَرْعُ الْأَشَمُ
 فِي لُحُومِ النَّاسِ كَالسَّبْعِ الضَّرِمِ
 حِينَ يَلْقَانِي وَإِنْ غِبْتُ شَتَمُ
 أُذُنِي عَنْهُ وَمَا بِي مِنْ صَمَمٍ
 جَاهِلٌ أَنِّي كَمَا كَانَ زَعَمُ
 ذِي الْحَنَاءِ أَبْقَى وَإِنْ كَانَ ظَلَمُ
 بَعْدَ مَا حَاقَتْ بِهِ إِحْدَى الظُّلَمِ
 يَبْنِدُونَ الشَّخْصَ مِنْ لَحْمٍ وَدَمٍ
 حَسَنٌ مَجْلِسُهُ غَيْرُ لُطَمٍ
 إِنَّ بَعْضَ الْمَالِ فِي الْعِرْضِ أَمَمُ
 تَلَفَ الْمَالِ إِذِ الْعِرْضُ سَلِمَ
 إِنَّ خَيْرَ الْمَالِ مَا أَدَّى الدِّمَمُ

(77) 訳

- 何かを約束するに当たっては、それを果たす意志がなければ、“はい”と言ってはならぬ。
- “いいえ”と言ったあとで、“はい”というのは良いが、“はい”と言った後で、“いいえ”と言うのはいただけない。
- “はい”と言った後で、“いいえ”と言うのは卑劣なことである。後悔するのを恐れるのであれば、まず“いいえ”と言え。
- “はい”と言った以上は、その言葉どおりのことをやり遂げるまで耐えよ。違約は非難されるべきものだ。
- 非難されるのは、男の落ち度であることを知れ。非難されるのを恐れない者は非難される。
- 私は隣人保護を求めてきた者を丁重にもてなし、彼の権利を尊重する。人が当然の権利を認めることは尊いことである。
- 私の家はマアッドの頂点にあり、また、私には首領、すなわち、誇り高き族長がいる¹⁾。
- 私が集会で食欲な肉食獣のように人々の肉をむさぼり食らう者ではないことに、君は気づくであろう。
- まことに最悪の人間とは、私と出会ったときには笑顔をみせ、私がいなかったときには罵る者のことである。

1) この一行は大英博物館およびウィーン写本によるもの。

- 10- 何と多くの悪口に私は耳を塞いだことだろう。とはいえ、私は耳がつまっているのではない。
- 11- 私が耐えたのは、愚者が私のことをかねて言っていたとおり、愚者だと見なすのを恐れてのことである。
- 12- まことに、悪口を言うものからは、顔をそむけて避けるのが無難である。たとえ、彼が不当な行為に及んでも。
- 13- ハーリドはシャアスがある災難にあったとき²⁾、良きはからいをしてくれたものだ。
- 14- 次々に降りかかる災難をもたらす運命から（彼を救ってくれた）。運命は、大切な関係の人物に急ぎ襲い掛かるものだ³⁾。
- 15- ハーリドがもてなす皿にはご馳走が一杯盛られており、その気前よさは古くからのもので、彼が開く宴席は静かで、人々は平手で殴りあうような馬鹿騒ぎはしない。
- 16- 彼は贈り物を与えるに当たっては、大量のものを与える。名誉を守るために財産の一部を与えることは、まことに安いものである。
- 17- 彼は善良な精神を備えており、名誉が無事保たれている限りは、財産が減ることを気にかけない。
- 18- 私は財産を名誉を守る盾として用いる。まことに、最善の財産は義務を果たすために費やされるものである⁴⁾。

2) ハーリド・ブヌ・アンマールはアンヌアマーン・ブヌ・カーブース、または、アルムシャッカ
ル城のペルシャ総督に近づく詩人の姉妹の子、すなわち、シャアス（アルムマツザク）の釈放
を仲介した。

3) *ash-shakhṣ min laḥm wa-dam*（肉と血の人物）とは「大切な関係の人」の意。

4) ウィーン写本により追加されたもの。

— (78) ヤジード・ブヌ・アルハッザーク —

يَزِيدُ بْنُ الْحَذَّاقِ

まえがき

この詩人の本名については、アブド・アルカイス系の雄族シャヌ（Shann）族の一員ヤジード・ブヌ・アルハッザークとしか伝えられていない。一説では彼は本詩集 No. 80 のアルムマッザク・アルアブディーのことだと言われている。彼が属したシャヌ族はペルシャ湾の北西岸を拠点として、北部はタミーム族の領域に接していた。その南側にはルカイズ（Lukayz）族がハジャルの海岸からオマーンに展開していた。

この詩と次の詩（No. 79）は、ラフム朝最後の王であったアンヌアマーン・ブヌ・アルムンジル・アブー・カーブース（A.D. 582-605）がこの部族に支配権を広げ税を取り立てようとしたのに対して反抗を表明したものである。ただし、No. 28 のアルムサッキブの詩から推測すると、王は抵抗を抑えて、タミームとアブド・アルカイスの領域を支配下に置くのに成功したものと考えられる。

詩人はこの詩で自分の馬について述べ、次いでアンヌアマーンを脅迫し、最後に自部族の自慢をしている。カーミル調、11行。

(78) テキスト

وَقَالَ يَزِيدُ بْنُ الْحَذَّاقِ الشَّنِيُّ

- | | |
|---|---|
| وَلَبِسْتُ شِكَّةَ حَازِمٍ جَلَدٍ | ١- أَعَدَدْتُ سَبْحَةَ بَعْدَ مَا قَرَحْتُ |
| أَوْ يُجْمَعُ السَّيْفَانِ فِي غَمْدٍ | ٢- لَنْ تَجْمَعُوا وَدَى وَمَعْتَبَتِي |
| يُخْفِي ضَمِيرُكَ غَيْرَ مَا تُبْدِي | ٣- نُعْمَانُ إِنَّكَ خَائِنٌ خَدِغٌ |
| فَعَلَيْكَهَا إِنْ كُنْتَ ذَا حَرْدٍ | ٤- فَإِذَا بَدَا لَكَ نَحْتُ أَثَلْتِنَا |
| وَأُصُولُنَا مِنْ مَحْتِدِ الْمَجْدِ | ٥- يَا أَبَى لَنَا أَنَّا ذُووْ أَنْفٍ |
| تَلَقَّ الْكَتَائِبَ دُونَنَا تَرْدِي | ٦- إِنْ تَغْزُ بِالْحَرْقَاءِ أَسْرَتْنَا |
| أَمْ خَلْتَنَا فِي الْبَاسِ لَا تُجْدِي | ٧- أَحْسَبْتَنَا لَحْمًا عَلَى وَضْمٍ |
| وَالْمَكْرُ مِنْكَ عَلَامَةُ الْعَمْدِ | ٨- وَمَكَرْتَ مُعْتَلِيًا مَحْنَتَنَا |
| فَانْظُرْ بِسَيْفِكَ مَنْ بِهِ تَرْدِي | ٩- وَهَزَزْتَ سَيْفَكَ كَيْ تُحَارِبَنَا |
| حَيْرَانَ أَوْبَقَهُ الَّذِي يُسْدِي | ١٠- وَأَرَدْتَ حُطَّةَ حَازِمٍ بَطْلٍ |
| سُبُلُ الْمَسَالِكِ وَالْهُدَى يُغْدِي | ١١- وَلَقَدْ أَضَاءَ لَكَ الطَّرِيقُ وَأَنْهَجَتْ |

(78) 訳

- 1- 私は6歳になった愛馬サブハ¹⁾の支度をする、堅固で決然とした戦士の武器で身をかためた。
- 2- お前たちは私の友情と非難を一つに合わせることは、決してできない。二振りの剣は、一つの鞘には決して納まらないのである。
- 3- ヌアマーンよ、まことにお前は裏切り者、詐欺漢である。お前は表向きとは異なる意図を心の中に隠している。
- 4- もし、お前が我らのギョリュウの樹を切りたいと思い²⁾、その意図を持ったなら、試してみよ。
- 5- 我らが誇り高く栄光に包まれた祖先につながることを、彼は認めない（彼の前にへりくだるのを求めている）。
- 6- もし、お前が愚かな（騎兵隊³⁾）を率いて我ら一族を攻撃するなら、お前は我らを守る速歩態勢の騎兵隊に遭遇するであろう。
- 7- お前は我らが、泥がつかないように椰子の葉で作ったバスケット⁴⁾にのせた肉のように（自らを守る力が無いものだ）と思い、また、我らは（戦争のような）難局には無力だと想像しているのか。
- 8- お前は我らの面目を卑しめて欺いた。しかし、その欺きはお前の意図するところをよく表す印でもある。
- 9- お前は我らと戦うために刀を振り上げた。だが、お前の刀をよく見よ、一体それで誰が切れるのか。
- 10- お前は慎重な英雄にふさわしいやり方を望んだが、心を取り乱して、己が行いのため破滅する男となった。
- 11- 今や、お前には道に光が差し、取るべき道が明らかになった。それへ導かれれば救われるであろう（それへの導きがお前を助けるであろう）。

1) サブハ (Sabḥa) は彼の雌馬の名。

2) ṯathra 「ギョリュウの樹」は詩人の部族の威光のことで、「威光に傷をつけるならやってみよ、必ず反撃するぞ」と脅している。

3) アンヌアマーン王の騎兵隊は al-malhā 「白黒の」と呼ばれていた。黒い鎧と白く輝く武器を備えていたからである。詩人は同じ語形の al-khalqā 「愚かな」と言って蔑んでいる。

4) wadam は椰子の葉その他で作ったバスケット状のもので、土ぼこりなどがつかないように、販売用の肉が載せられる容器。事故の防衛力の無いことをこのような肉にたとえたもの。

— (79) ヤジード・ブヌ・アルハッザーク —

يَزِيدُ بْنُ الْحَدَّاقِ

まえがき

この詩は No. 78 と同じく、アンヌアマーン王が権威を広げようとするのに対して、詩人の部族、すなわち、アブド・アルカイス系のシャンヌ族の反抗姿勢を表明したものである。まず、武器と愛馬の備えを語り、剣にふれ、最後に件の王を脅迫している。No. 78 はカーミル調であったがこの詩はタウィール調で韻律が異なる。なお、カイロ版により6行目が追加され12行となる。

(79) テキスト

وَقَالَ يَزِيدُ بْنُ الْحَدَّاقِ أَيْضًا

- | | |
|---|---|
| لَدَيَّْ، وَأَنْبَى قَدْ صَنَعْتُ الشَّمُوسَا | ١- أَلَا هَلْ أَتَاهَا أَنَّ شِكَّةَ حَازِمٍ |
| كَأَنَّ عَلَيْهَا سُنْدُسًا وَسَدُوسَا | ٢- وَدَاوَيْتُهَا حَتَّى شَتَّتْ حَبَشِيَّةً |
| رَبَاعِيَّةً وَبَازِلًا وَسَدِيسَا | ٣- فَصَرْنَا عَلَيْهَا بِالْمَقِيطِ لِقَاحَا |
| عَلَى رِبْدَاتٍ يَغْتَلِينَ خُنُوسَا | ٤- فَاصْتُ كَتَيْسَ الرَّبْلِ تَنْزُو إِذَا نَزَتْ |
| دِلَاصًا وَذَا غَرْبٍ أَحَدٌ ضَرُوسَا | ٥- نُعِدُّ لِيَوْمِ الرُّوعِ زَعْفًا مُفَاضَةً |
| إِذَا شَهِدَ الْجَمْعُ الْكَثِيفُ خَمِيسَا | ٦- نُحِيدُ عَلَيْهَا الْبَرْزَ فِي كُلِّ مَازِقٍ |
| عَلَى مَالِنَا لِيُفْسَمَنَّ خُمُوسَا | ٧- تَحَلَّلْ أَيْتَ اللَّعْنِ مِنْ قَوْلِ آثِمٍ |
| فَإِنَّ لَنَا أَمْرًا أَحَدٌ غَمُوسَا | ٨- إِذَا مَا قَطَعْنَا رَمْلَةً وَعَدَابَهَا |
| وَأِلَّا تُقِيمُوا كَارِهِينَ الرُّوُوسَا | ٩- أَقِيمُوا بَنَى النُّعْمَانِ عَنَّا صُدُورَكُمْ |
| يَعُدُّ عَلَيْنَا غَارَةً فَحُبُوسَا | ١٠- أَكُلْ لَيْمٍ مِنْكُمْ وَمُعْلَهَجٍ |
| صَرَارِيَّ تُعْطَى الْمَاكِسِينَ مَكُوسَا | ١١- أَلَا ابْنَ الْمُعَلَّى خَلَتْنَا وَحَسْبَتْنَا |
| تَجِدُ حَوْلَ أَبْيَاتِي الْجَمِيعَ جُلُوسَا | ١٢- فَإِنْ تَبَعْتُوا عَيْنًا تَمْنَى لِقَاءَنَا |

(79) 訳

1- 私が慎重な判断を下す勇者の武器をととのえ、愛馬アッシャムース¹⁾を戦闘にそな

1) No. 78, 1行では、愛馬の名はサブハ。

- えて見事に鍛え上げた情報が彼女に伝わったのだろうか。
- 2- 私は愛馬に鍛練用の餌を与えた。ために、冬になると馬は濃緑色となり、あたかも、背に錦の布と緑の頭巾を乗せているかのようになった²⁾。
 - 3- 我らは愛馬を酷暑の夏の間、7歳と9歳と8歳の乳母ラクダにゆだねた³⁾。
 - 4- 馬は、夏の終わりにしおれる牧草を満腹した野生の雄ヤギのような活力を取り戻した。雄ヤギは軽快な四肢で飛びはねる時は、十分な余力を残して早や駆けする。
 - 5- 我らは戦いの日に備えて⁴⁾、滑らかでゆったりとした鎖帷子と軽くて（敵に対して）性悪な剣を準備した。
 - 6- 密集した軍勢が敵軍と相まみえるとき、我らは各戦場でそのような馬を駆って強奪し見事に勝つ。
 - 7- 例外条件をつけて誓うが良い。お前が呪われずにすめばよいが、罪深いお前は、我らの財産を奪って戦利品とし、5分の1ずつ分配すると誓った⁵⁾。
 - 8- 我らはどのような砂漠を横断し、その縁に達しようと、さらに困難な事柄へ突進する力をそなえている。
 - 9- アンヌアマーンの一族よ、お前達の胸を我らからそむけ退去せよ。さもなければ、お前達の意に反して、首を捻じ曲げてやることになる⁶⁾。
 - 10- お前達のなかの卑劣な者および生まれが卑しい者が我らを襲撃し、悪事を働く準備をしているのか。
 - 11- （位を高められた王の）倅よ、お前は我らを徴税人に唯々諾々と税を支払う船乗りと思っているのではないか。
 - 12- もし、お前が我らの様子を探り出そうとして探索人を派遣するなら、彼は私のテントのまわりに部族全員が座っているのを見るであろう。

2) 馬が毛変わりした事を述べている。馬の鍛練用の餌については No. 61, 4行参照。sundus は薄い金欄のこと。

3) 乳母ラクダが3種挙がっている。rabāʿī, bāzil, sadīs はそれぞれラクダの門歯、初歯、6番歯のこと、年齢では7歳、9歳、8歳を表す。

4) yuʿiddu「彼は備える」と nuʿiddu「我らは備える」の読みがある。後者で訳したが、前者なら主語は一行目の al-ḥāzim と考えられる。ḍarūs は乳搾り人に嗜み癖のある性悪なラクダのことで、敵に対して鋭利な刀をこれにたとえている。

5) 例外条件をつけて誓うとは、例えば、ʿin shāʾa llāh「もし神のご意志ならば」のような文句を言っただけのこと。これを hill と言う。ʾabayta l-laʿna「呪いから救われよ」はラフム朝の王への呼びかけ言葉。戦利品を5等分して、その5分の1を神のものとするのは、バドルの戦いで初めて導入された（コーラン8章41節「戦利品はいかなるものでも、その5分の1は神のもの、使徒のもの、近親者、孤児、貧者および旅人のものであることを知れ」）と言われているが、ジャーヒリーヤ時代に詠まれたこの詩に5分の1のことが言われているのは注目される。Lane の辞書では KhMS の項に Addee ibn Hātim の言として「私はジャーヒリーヤには戦利品の4分の1を、イスラームでは5分の1を取った」とある。

6) 退去しなければ捕らえて首をはねるぞ、と脅している。

—— (80) アルムマツザク・アルアブディー ——

المُمَزَّق العَبْدِيّ

まえがき

本名シャアス・ブヌ・ナハール・ブヌ・アスワド (Sha's b. Nahār b. °Aswad)。この詩人は no. 77 で述べたようにアルムサッキブ (No. 28, 76, 77) の姉妹の子、つまり、甥にあたる。彼の作品はわずかししか伝えられていない (『詩と詩人たち』 235頁他)。後述するように、この作品も彼の作品ではない可能性もある。

このため、アルアンバーリーによれば、アルムファッダルおよびサアラブは「アルムマツザクは現世を非難した最初の人物」と評した。しかし、イブン・クタイバは「現世を非難した詩を最初に詠んだのはヤジード・ブヌ・ハッザーク」だと伝えている。

イブン・クタイバは彼のことを jāhili qadīm 「ジャーヒリーア時代の古詩人」と述べている (『詩と詩人達』 p. 235-6)。しかし、彼がアルムサッキブの甥であるとすれば、それほど古い時代の詩人ではないことになる。すなわち、アルムサッキブはアブー・カーブス (ラフム朝最後の王、在位580-585 又は 585-507) に向けた詩を詠んでいるからである (No. 28)。アルムマツザク自身も次の No. 81, 3行で同じ王の名を上げているが、同時代の詩人であったか、きわめて疑わしい。

アルアンバーリーのテキストでは 1-6行までしかあがっていないが、ウィーン写本では、アブー・ウバイドが伝えた次の一行が加わり、7行となっている。その内容からアブー・ウバイドは、この詩は No. 78, 79 でとりあげたヤジード・ブヌ・アルハッザークの作であると断じている。これを信じるのであれば、6行目のものが最初に置かれ、追加の行が3行目に配置され、6, 1, 追加の行、2, 3, 4, 5 の順序が元の姿だったと推定される。

°idh ghammaḍūnī wa-mā ghummiḍtu min wasanin

wa-qāla qā'ilhum °awdā bnu khadhdhāqi

(彼らは私の目を閉じた。私が目を閉じられたのは眠かったからではない。

ある者が「イブン・ハッザークはみまかった」と言った。)

詩の内容は常ならぬ現世を非難し、死の床にある詩人が彼の死後、家族が行うであろう葬儀の模様を想像するまま語っている。バシート調、6行 (または 7行)。

(80) テキスト

وَقَالَ الْمُمَرِّقُ الْعَبْدِيُّ

- ١- هَلْ لِفَتَى مِنْ بَنَاتِ الدَّهْرِ مِنْ وَاقٍ
 ٢- قَدْ رَجُلُونِي وَمَا رُجِلْتُ مِنْ شَعَثٍ
 ٣- وَرَفَعُونِي وَقَالُوا: أَيُّمَا رَجُلٍ
 ٤- وَأَرْسَلُوا فِتْيَةً مِنْ خَيْرِهِمْ حَسَبًا
 ٥- هَوْنٌ عَلَيْكَ وَلَا تَوَلَّعْ بِإِشْفَاقٍ
 ٦- كَأَنِّي قَدْ رَمَانِي الدَّهْرُ عَنْ عُرْضٍ
- أَمْ هَلْ لَهُ مِنْ حِمَامِ الْمَوْتِ مِنْ رَاقٍ
 وَأَلْبَسُونِي ثِيَابًا غَيْرَ أَخْلَاقٍ
 وَأَذْرَجُونِي كَأَنِّي طَيٌّ مُحْرَقٍ
 لِيُسْنِدُوا فِي ضَرْحِ الثُّرْبِ أَطْبَاقِي
 فَإِنَّمَا مَالُنَا لِلْوَارِثِ الْبَاقِي
 بِنَافِذَاتٍ بِـلَا رِيَشٍ وَأَفْوَاقٍ

(80) 訳

- 1- 時世の転変から人を守る者がいるだろうか。死が近よるのをさえぎってくれる魔術師がいるのだろうか。
- 2- 彼らは私の髪を櫛ですくが、髪が乱れたのですかれるのではない。彼らは私に着物を着せるが、古着を着せるのではない。
- 3- 彼らは私を持ち上げて“そもそも何をした人か”と尋ねる。彼らは私を布で包むが、私は、子供らがねじって叩き合って遊ぶ、細長く丸めた頭巾のようになる¹⁾。
- 4- 彼らは出自正しい若者らを送って（墓を掘らせ）土の中の墓所に私の亡骸を納めるのである。
- 5- 悲しむではない。（私が死んだとて）心配するな。なぜなら、我らの財産は跡継ぎに残っているからだ。
- 6- まるで、時世が（私の不意をついて）横合いから羽根も矢筈もない矢で私を射すくめたようである。

1) mikhrāq 「ハンカチ、ターバンの類」で、子供はこれをねじって叩き合って遊ぶ。死体は防水用に蠟引きした布で包むが、包まれた形がねじられて細長くなった mikhrāq に似ていると言ったもの。

— (81) アルムマツザク・アルアブディー —

المُمَزَّقُ الْعَبْدِي

まえがき

この詩は脱落部分が多く内容上も意味不明のところがあり理解が困難であるが、元来、補遺 No. 4 (No. 130) の詩 (7行) と一つのものであったとされるので、まとめて訳した。

すなわち、補遺 No. 4 の7行分を、No. 81 の3-7行と11, 15行 (計7行) として適当と思われる順序に追加配列して訳した。補遺としての追加分はアルマルズキーの伝えているもので、ウィーン写本によるものである。タウィール調、9+補遺 No. 4 の7行、計16行。

(130) テキスト

وَقَالَ الْمُمَزَّقُ الْعَبْدِيُّ

وَحَانَ مِنَ الْحَيِّ الْجَمِيعِ تَفَرُّقُ
قِطَارُ السَّحَابِ وَالرَّحِيقُ الْمُرَوِّقُ
عَلَى جِلْهَةِ الْوَادِي مَعَ الصُّبْحِ تُوسِقُ
عَلَيْهِنَّ سِرْبَالُ السَّرَابِ يُرْفِقُ
مُحَرَّمَةٌ فِيهَا لَوَامِعُ تَخْفِقُ
بِسُرَّةٍ بَيْنَ الْحَزَنِ وَالسَّهْلِ رَزْدُقُ
تَحُوطُ عَلَى آثَارِهِنَّ وَتَلْحَقُ
فَأَضْمَرَ مِنْهَا حُبْتُ نَفْسٍ مُمَزَّقُ
وَلَا حَتَّ لَنَا نَارُ الْفَرِيقَيْنِ تَبْرُقُ
وَوَدَّ الَّذِينَ حَوْلَنَا لَوْ تُشْرِقُ
تُؤَاضِعُ مِنْ قَرْنِي جَدُودَ وَتَمْرُقُ
عَلَى الْعَيْنِ تَعْتَاذُ الصِّفَا وَتُمَرِّقُ
لَدُنْ صَرَحَتْ حُجَّاجُهُمْ فَتَفَرَّقُوا
بِأَنْ يَجْنُبُوا أَفْرَاسَهُمْ ثُمَّ يَلْحَقُوا
بِعُذْرٍ وَلَا يَزْكُو لَدَيْهِ التَّمَلُّقُ
أَحْذُ كَصَدْرِ الْهِنْدُوَانِي مِخْفَقُ

(81) テキスト

وَقَالَ الْمُمَزَّقُ أَيْضًا

١- صَحَا مِنْ تَصَابِيهِ الْفُؤَادُ الْمَشَوِّقُ
٢- وَأَصْبَحَ لَا يَشْفِي غَلِيلَ فُؤَادِهِ
٣- لَدُنْ شَالَ أَحْدَاغُ الْقَطِينِ عُذْيَّةُ
٤- تَطَالَعُ مَا بَيْنَ الرَّجَى فَقَرَّاقِرِ
٥- وَقَدْ جَاوَزَتْهَا ذَاتُ نِيرَيْنِ شَارِفِ
٦- بِجَأَوَاءِ جُمُهورِ كَأَنَّ طَرِيقَهَا
٧- يَشُولُ عَلَى أَقْطَارِهَا الْقَوْمُ بِالْقَنَا
٨- وَقَالَ جَمِيعُ النَّاسِ: أَيْنَ مَصِيرُنَا
٩- فَلَمَّا أَتَى مِنْ دُونِهَا الرِّمْتُ وَالْعَصَا
١٠- فَوَجَّهَهَا غَرْبِيَّةٌ عَنْ بِلَادِنَا
١١- فَجَالَتْ عَلَى أَجْوَاذِهَا الْحَيْلُ بِالْقَنَا
١٢- فَمَنْ مُبْلِغُ النُّعْمَانِ أَنَّ أَسِيدًا
١٣- وَأَنَّ لُكَيْزًا لَمْ تَكُنْ رَبَّ عُكَّةٍ
١٤- فَضَى لِجَمِيعِ النَّاسِ إِذْ جَاءَ أَمْرُهُمْ
١٥- لِثُبْلَعْنِي مَنْ لَا يُكْدِرُ نِعْمَةً
١٦- يَوْمُ بِهِنَ الْحَزَمِ خِرْقُ سَمِيدَعُ

(81+130) 訳

- 1- (No. 81-1) 欲望に駆られた心は青春の情熱から覚め、集まっていた部族は別れの時を迎えた。
- 2- (同-2) 彼の心の熱気は雲が降らす雨も、澄み切ったブドウ酒も癒すことができなくなった。
- 3- (No. 130-1) 早朝、婦人らを乗せたラクダの一行が溪谷に沿って夜明けの中、登って行った。
- 4- (同-2) 婦人らの乗り物はアッラジャーとクラーキルの間を登っていったが¹⁾、彼女らは蜃気楼の霧に覆われて、ちらちらと輝いていた。
- 5- (同-3) 登り道はえんえんと伸びた古道で、進むのは容易でなく²⁾、蜃気楼の霞が輝きゆらめいていた。
- 6- (同-4) 一行は多数の(鎖帷子をまとった)茶色の騎兵隊に守られて進んでいるが、スッラでの道は、でこばこの丘の上と平原に(果てしなく)伸びていた³⁾。
- 7- (同-5) (護衛している)人々はその地方を登っていったが、手には槍を持ち、婦人らの後方を固めたり、寄り添ったりしていた⁴⁾。
- 8- (No. 81-7) 皆の者が“一体、我々の目的地はどこか”と尋ねると、ムマッザクは悪知恵を働かせて、本心を明かさなかった。
- 9- (同-8) やがて、アッリムスとアルガダーの林が前方に広がる地点に到ると⁵⁾、両軍の戦火が見えてきた。
- 10- (同-9) 彼は軍勢を我々の土地の西に向けた。周りにいた者たちは(恐怖に駆られ)軍勢が東に向かってくれればよかった、と思ったのだが。
- 11- (No. 130-6) 騎士らはジャドゥードの頂から全速力で駆け出し敵の真っ只中で左右に動いて槍を繰り出し、次いで、(敵の中から)外に出る⁶⁾。
- 12- (No. 81-3) さて、アンヌアマーンに次のように伝える者は誰か。すなわち、“彼の姉妹の子はアルアインのうえのアッサハーをしばしば訪れ、歌を歌う⁷⁾”。
- 13- (同-4) ルカイズ族は、巡礼者らがミナーを出て各地に離散するときにバターの革袋を持ち歩いて売のような商売人ではない(れっきとした武装集団である)。
- 14- (同-5) (ルカイズ族の族長は) 敵を襲撃する事態となれば、すべてのものに戦闘用の馬を伴い、ラクダに乗るよう義務づけるのである。

1) アッラジャー (ar-Rajā) とクラーキル (Qurāqir) は、いずれも地名。
 2) jāwazāt-hā の主語は道 (dhāt nīrayni すなわち「道」) で -hā は ʾahdāju l-qaṭīni (3行「婦人を乗せた一行」) を受けている。すなわち、道が旅行団を通したという変わった表現だとマルズーキーは解説している。
 3) スッラ (Surra) はアーミル・ブヌ・サアサア系の Abū Bakr b. Kilāb 族の居住地。Razdaq は中世ペルシャ語 rastak かペルシャ語 rastah からの借用語で「馬や樹の列」を表し、やがて「長く伸びた道」そのものを表すようになった。ʾajʾā (女性単数 jaʾwāʾu) は「茶色の」から「鎖帷子をまとった多数の騎馬隊」を表す。
 4) この行で詩人アルムマッザクが指揮者であることがわかる。
 5) al-rimth, al-ghadā はいずれも「タマリスクの樹」のこと。
 6) この一行は fa- で始まっており、その前に脱落部分があると思われる。
 7) ここでの「甥」が誰を指すのか不明。アルアイン (al-ʿAyn) はアルムハッリム (al-Muḥallim) という運河の水源で、ハジャル地方に水が送られていた。アッサファー (al-Ṣafā) はアルパハラインのハジャルにあった砦。

- 15- (No. 130-7) 彼女が私に善意でしたことに仇なす者のことを伝えるためである。(そのような者の) へつらいは決して好首尾をもたらさない⁸⁾。
- 16- (No. 81-6) 気前がよく美丈夫な(族長)は軍馬をごつごつした高地へ向けるが、彼はインド鉄の剣の刃のように鋭く切りまくる。”と(伝えよ)。

8) この一行の前後関係は不明。

— (82) ムッラ・ブヌ・ハンマーム —

مُرَّةُ بْنُ هَمَّامٍ

まえがき

本名ムッラ・ブヌ・ハンマーム・ブヌ・ムッラ (Murra b. Hammām b. Murra)。この詩人に関する資料はほとんど見当たらないが、本詩集の No. 72, 78 および 83 のアブド・アルマシーフの血筋の5代前の祖先に当たるとされている。また、彼の父方の伯父はジャッサース・ブヌ・ムッラ (Jassās b. Murra) でバスースの戦いで姉妹であったジャリーラ (Jalīla) の夫クライブ・ブヌ・ラビーア (Kulayb b. Rabī'a) を殺した (『歌の書』4, p. 139)。従って、この詩人はジャーヒリーヤのかなり古い時代の人物と推察される。

彼はバクル系の雄族シャイバーン族の一員でありラフム王家との関係が深かったと思われる。

この詩では、一群のラクダを相手に近い場所で放牧しているあいだに、アウフ (ʿAwf) という男に略奪された。詩人の部族は各地に散在していて助けることができなかった。詩人は自らラクダの救出に乗り出すのだが、最後は相手に敗北したかのような表現で終わっている。

これについて、マルズーキは皮肉な表現であって、逆に勝利を表すと説いている。敵を勇者とほめるのがアラブの騎士道精神であった、という次第である。カーミル調、9行。

(82) テキスト

وَقَالَ مُرَّةُ بْنُ هَمَّامٍ بْنُ مُرَّةَ بْنِ دُهَلٍ بْنِ شَيْبَانَ

- | | |
|---|--|
| ۱- يَا صَاحِبَيَّ تَرَحَّلَا وَتَقَرَّبَا | فَلَقَدْ أَنَّى لِمُسَافِرٍ أَنْ يَطْرَبَا |
| ۲- طَالَ النَّوَاءُ فَقَرَّبَا لِي بَارِلًا | وَجَنَاءَ تَقَطَّعَ بِالرُّدَافَى السَّبْسَبَا |
| ۳- أَكَلْتُ شَعِيرَ السَّيْلِجَيْنِ وَغَضَّهْ | فَتَحَلَّبْتُ لِي بِالنَّجَاءِ تَحَلَّبَا |
| ۴- وَكَأَنَّهَا بِلَوَى مُلِيحَةٍ خَاضِبُ | شَقَاءُ نَفِيقَةٍ تَبَارِي غِيَهَبَا |
| ۵- يَا عَوْفُ وَبِحَكَ فِيمَ تَأْخُذُ صِرْمَتِي | وَلَكُنْتُ أَسْرَحُهَا أَمَامَكَ عَزَبَا |
| ۶- تَاللَّهِ لَوْلَا أَنْ تَشَاءَى أَهْلُهَا | وَلَشَرُّ مَا قَالَ امْرُؤٌ أَنْ يَكْذِبَا |
| ۷- لَبَعَثْتُ فِي عُرْضِ الصُّرَاخِ مُفَاضَةً | وَعَلَوْتُ أَجْرَدَ كَالْعَسِيبِ مُشَدَّبَا |
| ۸- لَتَرَكْتُكُمْ إِبِلَى رِتَاعًا إِنْنِي | مِمَّا أَرُدُّ الْجَيْشَ عَنْهَا حُبَبَا |
| ۹- لِلَّهِ عَوْفٌ لَا بَسًا أَثْوَابَهُ | يَا لَهْفَ نَفْسِي قِرْنٌ مَا أَنْ يُعْلَبَا |

(82) 訳

- 1- おお、わが友兩名よ、(ラクダに鞍を乗せ) 急げ。旅立つ者にとって苛立ちを覚える時となった。
- 2- ここでの滞在は長かった。ゆえに、草木の無い砂漠を、背後に乗せる者とともに渡る 9 歳に達した頑強な雌ラクダを、私に急ぎ引き出せ¹⁾。
- 3- この雌ラクダはアッサイラフーン産の大麦やクローバーを食べたので²⁾、私のために乳がほとばしるような速力で駆けた。
- 4- また、このラクダはムライハの砂漠の縁に住む雄ダチョウのようで、脚が緑色をおびていて、黒い雄ダチョウと競う雌ダチョウのよう (に駿足) である³⁾。
- 5- おお、アウフよ。お前に災いあれ。何ゆえあって私のラクダの群れを奪ったのか。私はかねてから、お前方の遠隔地に放牧して来たのだが (今になって奪うとは何ゆえか)。
- 6- 神かけて、らくだを所有する一族が各地に散っていなかったならば...。人がうそ偽りを言うのは最悪のことだ⁴⁾。
- 7- 私は助けを求める声にこたえて、鎖帷子で身を固めた軍勢を派遣し、また葉を刈りおとしたナツメヤシの枝のような毛の短い馬にまたがり出撃しただろう。
- 8- そうなれば、お前はきっと、私のラクダを手放し、自由に牧草を食べさせることになろう。私はラクダの群れから略奪者らを失意のうちに追い返すであろう。
- 9- 武装したアウフは何と天晴れな勇者であることか。これに引き換え、(彼を相手として) 打ち負かされる私は何と不幸なことだろう⁵⁾。

1) rudāfā 「背後に乗せる補助者」のこと。bāzil は「9歳に達した雄または雌ラクダ」。

2) アッサイラフーン (al-Saylahūn) またはこれの定冠詞をとったものは、イラクのアルヒーラ近くの地名で古詩に良く出てくる。ʿudd にはクローバーのほか、この土地で産するもので作った飼料の意味もある。この一行から詩人は、イラクの農耕地の者と思われる。

3) niqniqa は「雌ダチョウ」。おそらく鳴き声から出来た擬声語であろう。ムライハ (Mulayha) はヤルブーウ (Yarbūʿ) の高地にある。khāḍib 「草を食べるため脚が緑色に染まる」の意味と思われる。

4) 7行の la- につながる。私は決してうそ偽りを言っているのではない、と脅している。

5) li-llāhi + 人名、これはほめ言葉。この 1行については前書き参照。

— (83) アブド・アルマシーフ・ブヌ・アサラ —

عَبْدُ الْمَسِيحِ بْنِ عَسَلَةَ

まえがき

この詩人の作品は既に、No. 72（酒宴で飲みすぎ愚行に及んだ男を風刺）と No. 73（遠隔地での狩猟の模様）で取り上げられている。本詩集の編者アルムファッダルは、この詩人の出自をアルアブディーとしているが、これは彼がアブド・アルカイス族の成員と見なしていたからであろう。しかし、彼はシャイバーン族の血筋につながる者で、アッシャイバーニーと呼ぶべきである。

No. 72で述べたとおり、彼は名前から見てキリスト教徒であったと思われる。

この詩はアッルンマ溪谷のウナイザ（Unayza）での戦闘を取り上げたものである。すなわち、バスースの戦いの第四回戦（推定5世紀中葉）にあたる。この詩の3行目ではバクル族が勝ったように述べているが、事實は、逆または引き分けであったというのが通説である。この戦いでシャイバーン族の敵対者となったのは、おそらくタミーム系のヤルブール族であったろうが、詳細は不明である。タウィール調、6行。

(83) テキスト

وَقَالَ عَبْدُ الْمَسِيحِ بْنِ عَسَلَةَ الْعَبْدِيُّ

- | | |
|--|--|
| فَإِنْ تَسْأَلِينِي تَسْأَلِي بِي عَالِمًا | ١- أَلَا يَا أَسْلَمِي عَلَى الْحَوَادِثِ فَاطِمًا |
| بِأَيْمَانِنَا نَفْلِي بِهِنَّ الْجَمَاحِمَا | ٢- غَدَوْنَا إِلَيْهِمُ وَالسُّيُوفُ عَصِيُّنَا |
| إِلَى الْحَوْلِ مِنْهَا وَالنُّسُورَ الْقَشَاعِمَا | ٣- لَعَمْرِي لِأَشْبَعْنَا ضِبَاعَ غَنِيَزَةٍ |
| وَنَجْعَلُهُنَّ لِلْأَنْصُوفِ حَوَاطِمَا | ٤- تَمَكَّكُ أَطْرَافَ الْعِظَامِ غُدِيَّةٌ |
| تَرَكْنَا عَلَيْهِ الذِّئْبَ يَنْهَسُ قَائِمًا | ٥- وَمُسْتَلَبٌ مِنْ دِرْعِهِ وَسِلَاحِهِ |
| فَقُولَا لَهُ: يَا أَسْلَمُ بِمُرَّةٍ سَالِمَا | ٦- فَأَمَّا أَحُو فُرْطٍ، وَلَسْتُ بِسَاخِرٍ |

(83) 訳

- 1- 時世の転変にも負けずに息災であれ、おお、ハーティマよ。そなたが私に（安否を）尋ねたければ、私のことを良く知っている者に尋ねよ。
- 2- 我らは朝出撃した。剣は右手に握られた棒同然で、それを叩きつけて（敵の）頭蓋骨を打ち据える。
- 3- わが命にかけて、我らはウナイザのハイエナとハゲタカどもに一年間満腹させ（る

だけの敵の屍をさらし) てやった¹⁾。

- 4- 早朝にハイエナは敵の骨髓を吸い出し、我らは彼らの鼻に剣で屈辱の印をつけた。
- 5- 何と多くの敵が鎖帷子も武器も奪われたことであろうか。我らはオオカミが立ち上がって彼らの肉に嗜み付くままにしておいた。
- 6- さて、クルトの兄弟にだが — 私はからかっているのではないが — 一言言ってやれ、“ムッラが無事である限り、お前も無事である”(既に、お前が彼を殺しておれば、私はお前を殺すぞ) と²⁾。

1) qash'am (複数 qashā'im) 「老いたハゲタカ」。この単語はアンタラのムアッラカ 80 行、ズハイルのムアッラカ 41 行にも用いられている。

2) クルト (Qurt) の兄弟、qūlā (兩名は言え) の兩名は、いずれも何者か不明。この一行は脅迫であるが、事実はムッラ (Murra) は殺されていて、詩人は皮肉を込めたもの、と説く者もいる。

—— (84) マッカース・ブヌ・アムル・アルアーイジー ——

مَقَّاسُ بْنُ عَمْرِو الْعَائِدِي

まえがき

本名ムスヒル・ブヌ・アンヌアマーン・ブヌ・アムル (Mushir b. al-Nuʿmān b. ʿAmr)。バクル族がイスラームに改宗する直前にシャイバーン族のもとへ移住した一家の出である。すなわち、預言者とほぼ同時代の人物である。マッカースは彼の綽名で、忠僕と言う意味のほか、「思いどおりのことを詩で表現する詩人」という意味も表す。血筋を表すアルアーイジー (al-ʿĀʾidhī) は彼の母 ʿĀʾidha に由来する。

彼の父系の血筋をたどると、一族はクライシュ族の支族フザイマ・ブヌ・ルアイイ (Khuzayma b. Luʿayy) につながっている。彼の一家は何かの事情があつて、父系のクライシュを離れて、シャイバーン族のバヌー・ラビーア・ブヌ・ズフル (Banū Rabīʿa b. Dhuhl b. Shaybān) のもとに移住し、その庇護民または同盟者 (khalīf) になったものらしい。この詩はシャイバーン族への賞賛詞で、ワーフィル調、4行という短いものである。

(84) テキスト

وَقَالَ مَقَّاسُ الْعَائِدِيُّ

فَلَا يَكُ مِنْ لِقَائِكُمُ الْوَدَاعَا	١- أَلَا أَبْلُغُ بَنِي شَيْبَانَ عَنِّي
وَعَيْشُ الْمَرْءِ يَهْبِطُهُ لُمَاعَا	٢- بَعِيشٍ صَالِحٍ مَا دُمْتُ فِيكُمْ
فَزَادَ اللَّهُ أَلَكُمْ ارْتِفَاعَا	٣- إِذَا وَضَعَ الْهَزَاهِرُ آلَ قَوْمِ
فَلَمْ أَرِ مِثْلَكُمْ حَزْمًا وَبَاعَا	٤- فَقَدْ جَاوَزْتُ أَقْوَامًا كَثِيرًا

(84) 訳

- 1- シャイバーン族の子らに私の伝言を伝えよ。“あなた方にお会いしたのが（今生の）別れとなりませんように。
- 2- 私はあなた方の中にいる間は良い暮らしをすることができました。人の暮らしは徐々に下向くものです¹⁾。
- 3- 戦争が人々の身分を低めるなら、髪がそれをさらに高めますように。
- 4- 私は多くの部族に隣人として庇護を受けましたが、あなた方ほど思慮分別があり、胸の広い人々を見たことはありません”と。

1) yahbuṭu-hu = yahbuṭu nafsa-hu 「自らを減じる、生活は徐々に悪くなる」の意。

— (85) マッカース・ブヌ・アムル・アルアーイジー —

مَقَّاسُ بْنُ عَمْرِو الْعَائِذِي

まえがき

この詩はイジュル (ʿJl) というバクル系の部族が、ファルジュ (Falj) という地でカルブ族と戦い勝利したことをほめ、詩人の部族を自慢したものである。

両者の戦いがいつごろあったのかは資料不足で不明である。No. 84, 4 行で述べているように、詩人はシャイバーン族のもとに移住しているあいだにも、他の多くの部族を訪ねて庇護を受け、そのたびに庇護をしてくれた部族をほめていたようである。ここで彼がほめているイジュルという部族はバクル・ブヌ・ワーイル系の部族でハニーファ (Ḥanīfa) 族と兄弟関係にあり、ともにイラクに移住している。タウィール調、8行。

(85) テキスト

وَقَالَ مَقَّاسٌ أَيْضًا

- | | |
|--|----|
| أُولَى فَأُولَى يَا أَمْرًا الْقَيْسِ بَعْدَمَا | ۱- |
| فَإِنْ تَكُ قَدْ نُجِّيتَ مِنْ غَمَرَاتِهَا | ۲- |
| تَذَكَّرْتَ الْخَيْلُ الشَّعِيرَ عَشِيَّةً | ۳- |
| فَوَاللَّهِ لَوْ أَنَّ أَمْرًا الْقَيْسِ لَمْ يَكُنْ | ۴- |
| لَقَاطَ أُسِيرًا أَوْ لَعَالَجَ طَعْنَةً | ۵- |
| فِدَى لِأُنَاسٍ ذَكَرُوهُمْ مَعِيشَةً | ۶- |
| فَإِنَّ بَنِي عَجَلٍ هُمْ صَبَّحُوكُمْ | ۷- |
| أَجِئْتُمْ إِلَيْنَا فِي بَقِيَّةِ مَالِنَا | ۸- |
| خَصَفْنَ بِأَثَارِ الْمَطِيِّ الْخَوَافِرَا | |
| فَلَا تَأْتِينَا بَعْدَهَا الدَّهْرَ سَادِرَا | |
| وَكُنَّا أُنَاسًا يَغْلُقُونَ الْأَيَاصِرَا | |
| بِفُلَجٍ عَلَى أَنْ يَسْبِقَ الْخَيْلَ قَادِرَا | |
| تَرَى خَلْفَهُ مِنْهَا رَشَاشًا وَقَاطِرَا | |
| تَرَى لِلثَّرِيدِ الْوَرْدَ فِيهَا نَوَاحِرَا | |
| صُبُوحًا، يُنْسَى ذَا اللَّذَاقَةِ، سَاعِرَا | |
| تُرْجُونَ مِنْ جَهْلٍ إِلَيْنَا الْمَنَاقِرَا | |

(85) 訳

- 1- イムル・アルカイスよ、お前に災いあれ。ラクダ隊が軍馬を伴い、すでにお前のラクダの足跡にひずめを入れて後をたどっているのだ¹⁾。

1) アラブは侵略するときには、戦闘用の馬を連れてラクダに乗り、戦場で馬に乗りかえた。ここで脅されているのは、イムル・アルカイス・ブヌ・バフル・ブヌ・ズバイル (Imr al-Qays b. Bahr b. Zuhayr b. Janāb al-Kalbī)。

- 2- たおえお前が（破滅の）どん底から逃れられたとしても、以後、愚かな思いで、我らを攻めるようなまねはするではない。
- 3- お前達の馬は夕暮れ時に食べる大麦のことを懐かしく思っているが、我らは馬には干し草を与える者である²⁾。
- 4- 神に誓って言うが、万一、イムル・アルカイスがファルジュの戦場で我らの軍馬より逃げ脚が早くなかったなら、
- 5- 夏の間、捕虜として過ごすか、槍で一突きされた傷の手当てをしていることだろう。すなわち、背の刺し傷から血が噴出したり、滴り落ちるのをあなたは見るだろう。
- 6- 出来うれば、（敗れた敵に）かつての（豊かな）生活を思い起こさせる人々の身代わりになりたいものよ。彼らが暗赤食のサリードを食べ³⁾、鼻を鳴らしている（かつての）姿をあなたは見るであろう。
- 7- まことにイジュルの子らこそ、お前達に以前の安楽な暮らしを忘れさせる熱い朝の飲み物を注いだ人々である⁴⁾。
- 8- お前達は我が方に（わずかな）残っている財産目当てに攻め寄せてきて、愚かにも、不当な振る舞いに及んだのか⁵⁾。

2) お前達の馬は、普段は集落の青々とした大麦を餌にしているが、戦場ではこれが得られず衰弱して役に立たない。それに引き換え、砂漠で鍛えた自軍の馬は、いつも干し草を食べているので平時も戦時と同じ動きをする、といったもの。

3) サリード (ṭharīd) とは「肉汁にパンをちぎって混ぜた食べ物」。6行、7行は敵を嘲笑したもの。

4) ṣabūh「朝搾ったミルク、朝酒」のことで、敵に敗北の苦渋を飲ませたこと。

5) 本来、農耕地に住む豊かなバクル族が、砂漠の貧しいイジュルの些細な財産を奪うのかと、皮肉っている。

—— (86) ラーシド・ブヌ・シハーブ ——

رَاشِدُ بْنُ شِهَابٍ

まえがき

本名ラーシド・ブヌ・シハーブ・ブヌ・アブダ (Rāshid b. Shihāb b. °Abda)。

この詩は次の No. 87と同じく、バクル・ブヌ・ワーイル系のヤシュクルとシャイバーンの兄弟部族間の争いを詠んだものである。前者の族長がこの詩人ラーシドで、後者の族長はカイス・ブヌ・マスウード (Qays b. Mas°ūd)。争いの原因は11行に述べられているイブン・タイバ (Ibn Tayba) の鎧の扱いをめぐって、とされている。詩人はカイスに公平な処置を求め、応じなければ戦争に訴えると脅し、北アラブが集まる聖月のウカーズの市で辱める、と詠んでいる。

ラーシドについては資料が乏しいが、カイス・ブヌ・マスウードについては良く知られている。

ラフム朝の最後の王アブー・カーブースはおよそ605年ごろ退位したが、このころからメソポタミアに接するアラブはサワード (Sawād) 地へ盛んに略奪をするようになった。ペルシャ皇帝パルベーズ (Parvēz) はこれを抑止するため、シャイバーンの族長カイス・ブヌ・マスウードにアルウブッラ (al-°Ubullā) を拠点として辺りの統治をゆだね、この地の税収を与えた。

アルウブッラはシャットルアラブ河の河口にある商業都市で、バスラにも近かった。

カイスがこの地位にあるとき、良く知られているズー・カールの戦いが起こり、すでにイラクに住んでいたシャイバーン、イジュルおよびヤシュクルなどバクル系連合軍が、ペルシャ騎兵二千の支援を受けたカイスの軍勢を破った。これは610年ごろのことである。ペルシャ皇帝は、アラブを抑止できなかったカイスを戦争の前に捕らえ、クテシフォンの牢に入れ獄死させた。一説では、彼はペルシャ軍とともに参戦したが、途中、逃亡した。しかし、後ほど皇帝に捕らえられ獄死した、とのことである。カイスの息子ビスターム・ブヌ・カイス (Bisṭām) は、有名なシャイバーンの族長で、7世紀初めにキリスト教徒になっている。アルアンバーリーのテキストでは12行となっているが、カイロ版では13-15行が加えられており、15行を訳した。

これらから推して、この詩は6世紀末の作品と見なされている。タウィール調、15行。

(86) テキスト

وَقَالَ رَاشِدُ بْنُ شِهَابٍ الْيَشْكُرِيُّ

لِقَيْسِ بْنِ مَسْعُودٍ بْنِ قَيْسِ بْنِ خَالِدِ الشَّيْبَانِيِّ

- ١- أَرَفْتُ فَلَمْ تَخْدَعْ بَعَيْنِي خَدْعَةً
 - ٢- وَلَكِنَّ أَنْبَاءَ أَتَتْنِي عَنْ أَمْرِي
 - ٣- وَلَكِنَّنِي أَقْصَى ثِيَابِي مِنَ الْخَنَا
 - ٤- فَمَهْلًا أَبَا الْخَنْسَاءِ لَا تَشْتُمْنِي
 - ٥- وَلَا تُوعِدْنِي إِنْنِي إِنْ تُلَاقِنِي
 - ٦- وَنَبْلٌ قِرَانٌ كَالسُّيُورِ سَلَاحِمٌ
 - ٧- وَمُطَرِدٌ الْكُعْبَيْنِ أَسْمَرُ عَاتِرٌ
 - ٨- مُضَاعَفَةٌ جَدْلَاءُ أَوْ حُطْمِيَّةٌ
 - ٩- لِعَادِيَّةٍ مِنَ السَّلَاحِ اسْتَعْرُتْهَا
 - ١٠- وَكُنْتُ زَمَانًا جَارَ بَيْتٍ وَصَاحِبًا
 - ١١- أَقَيْسَ بْنِ مَسْعُودٍ بْنِ قَيْسِ بْنِ خَالِدٍ
 - ١٢- بِذِمِّ يُعَشِّي الْمَرْءَ حَزْبًا وَرَهْطَةً
 - ١٣- بَنَيْتُ بِشَاجٍ مَجْدَلًا مِنْ حِجَارَةٍ
 - ١٤- أَشَمَّ طَوَالًا يَدْحَضُ الطَّيْرُ دُونَهُ
 - ١٥- وَيَأْوِي إِلَيْهِ الْمُسْتَجِيرُ مِنَ الرَّدَى
- وَوَاللَّهِ مَا دَهْرِي بِعِشْقٍ وَلَا سَقَمٍ
وَمَا كَانَ زَادِي بِالْحَيْثِ كَمَا زَعَمَ
وَبَعْضُهُمْ لِلْغَدْرِ فِي ثَوْبِهِ دَسَمَ
فَتَقَرَّعَ بَعْدَ الْيَوْمِ سِنَكَ مِنْ نَدَمٍ
مَعِيَ مَشْرِفِي فِي مَضَارِبِهِ قَضَمَ
وَفَرَّغَ هَتُوفٌ لَا سَقَى وَلَا نَشَمَ
وَذَاتُ قَتِيرٍ فِي مَوَاصِلِهَا دَرَمَ
تُعَشِّي بَنَانَ الْمَرْءِ وَالْكَفَّ وَالْقَدَمَ
وَكَانَ بِكُمْ فَقَرٌّ إِلَى الْغَدْرِ أَوْ عَدَمَ
وَلَكِنَّ قَيْسًا فِي مَسَامِعِهِ صَمَمَ
أُمُوفٍ بِأَذْرَاعِ ابْنِ طَيْبَةٍ أَمْ تُذَمُّ
لَدَى السَّرْحَةِ الْعِشَاءِ فِي ظِلِّهَا الْأَدَمَ
لَأَجْعَلُهُ عِزًّا عَلَى رَغَمٍ مِنْ رَغَمٍ
لَهُ جَنْدَلٌ مِمَّا أَعَدَّتْ لَهُ إِرَمَ
وَيَأْوِي إِلَيْهِ الْمُسْتَعِيزُ مِنَ الْعَدَمِ

(86) 訳

- 1- 私は眠れなかった。眠気が両目に全く訪れなかった。神に誓って言うが、私が（不眠に）苦しんでいるのは恋や病のためではなく、
- 2- ある男からの情報が私に届いたからである。だが、私の旅の糧食は¹⁾、彼が言っているほど悪いものではない。
- 3- 否、私は着衣を悪評から遠ざけた。もっとも、一部の者たちの着衣は裏切りでよごれているのだが。
- 4- 控えよ、アブー・アルハンサーウよ²⁾。決して私をののしるな。さもないければ、お前は悔やみ、絶望のあまり歯軋りするであろう。
- 5- また、お前は決して私を脅してはならぬ。お前に会えば、私はアルマシャーリフ産の

1) zādī「私の旅の糧」とは、「私の評判」をさす。

2) アブー・アルハンサーイ (Abū al-Khansā'i) はカイス・ブヌ・マスウードのこと。

- 剣を持っている（ことをわきまえておれ）³⁾、あまりに切りまくったので若干刃こぼれしてはいるが。
- 6- (私の) 矢は長くて皮ひものようにしなやかだ。弓は一番上の枝で作ったもので、川の水で育ったものでもなく、また、弱いナシャムの木で作ったものでもない⁴⁾。
- 7- 二つのつなぎ目のある槍は褐色で強固であり⁵⁾、つがいの環を頭が平たい鋌でとめた鎧で（私は身を固めている）。
- 8- その鎧は重ね編まれていて強固である。それはまた、(名匠) フタマの作で、人の指と手のひらと足を覆っている⁶⁾。
- 9- これらの武器は昔のアードの民に由来する最高のもので⁷⁾、私が借り受けたのである。お前達がかつては裏切る力が乏しいか、全くそれを欠いていた。
- 10- 私はしばらくある一家に隣人として庇護され、(その一家の) 友人であった。しかし、今やカイスの耳にはものが聞こえないようだ。
- 11- カイス・ブヌ・マスウッド・ブヌ・カイス・ブヌ・ハーリドよ、お前はイブン・タイバの鎧を誠実に扱うのか。それとも非難される（扱いをする）つもりか。
- 12- この非難は、(ウカーズの) 細い枝を張ったサルハの木陰の皮テントの辺りで⁸⁾、男と彼の一族を恥辱で覆い尽くすであろう。
- 13- 私はサージュに石で城を築いたが⁹⁾、それを私を嫌う者に対する砦にするためである。
- 14- その城は誇らしく高くそびえ、鳥も（頂上に達する前に）下に滑り降りる。また、その城には昔、イラムが準備していた石が使われている。
- 15- そこには死の災厄から逃れて庇護を求める者や、欠乏の苦難から償いを求める者たちが避難してくる。

3) マシュラフィー (mashrafi) は al-Mashārif という村（シリアまたはアルヤマンにあったとされる）で作られた剣、または、この名の刀工が作った剣、などと諸説がある (No. 12, 10 行で既出)。

4) 弓の材料となる木は nabʿa, shawḥat, sarāʿa および shiryāna などと呼ばれている。これらはサラート (Sarāt) 山で雨水だけで育つ。灌漑水で育てると柔らかくなるとされる。ここでは nasham という木があげられているが、イムル・アルカイスなどは弓材としてほめている。

5) 槍のつなぎ目とは、竹製の槍のどの部分のことか良く分からない。アルマルズーキーは上と下の継ぎ目と説いているが。

6) フタマ・ブヌ・ムハーリブ (Ḥutama b. Muḥārib b. ʿAbd al-Qays) は鎧作りの名匠。

7) アード (ʿĀd) とは、コーランにも登場する消失した古代アラブのことで、さまざまな伝説が伝えられている。鎧の製作に長けていたというのもその一つ。

8) サルハ (sarḥa) は大木になる樹木で、ウカーズにもあったとされ、その木陰にテントが張られていた (集合名詞 sarḥ)。

9) サージュ (Thāj) またはサアジュ (Thaʿj) は、アルバハラインにあった村。13行から15行に述べられている城は実際の城ではなく、詩人が部族の栄光をなぞらえて自賛している。

—— (87) ラーシド・ブヌ・シハーブ ——

رَاشِدُ بْنُ شِهَابٍ

まえがき

この詩は No. 86 の詩と関連したもので、ヤシュクルとシャイバーン両部族はついに戦闘に突入し、詩人は自部族の若者たちに、困難な時を迎えたが耐え忍べと呼びかけ、同時に、シャイバーン族を罵倒している。また、シャイバーン族の族長カイス・ブヌ・マスウードがヤシュクル族を軽蔑した言い草を取り上げ、彼は族長でありながら、ヤシュクル族が殺した自部族のアムルの復讐もせずに戦場から逃げたと揶揄し、最後は自部族の自慢をしている。この戦闘でアムルは殺され、カイス・ブヌ・マスウードも負傷したようだ。

7 行にカアバ神殿で誓ったとあるが、これは、ジャーヒリーヤの慣行に見られるもので、この部族がイスラームに改宗する前に詠まれたことを推測させる。タウィール調、8 行。

(87) テキスト

وَقَالَ رَاشِدٌ أَيْضًا

- | | |
|---|--|
| أَرَى حِقْبَةً تُبْدِي أَمَاكِينَ لِلصَّبْرِ | ١- مَنْ مُبْلَغٌ فَتَيَانَ يَشْكُرُ أَنْبَى |
| هُمْ أَهْلُ أَنْبَاءِ الْعِظَائِمِ وَالْفَخْرِ | ٢- فَأَوْصِيكُمْ بِالْحَيِّ شَيْبَانَ إِنَّهُمْ |
| لَيَشْكُرُ أَحْلَى إِنْ لَقِينَا مِنَ التَّمْرِ | ٣- عَلَى أَنَّ قَيْسًا قَالَ قَيْسُ بْنُ خَالِدٍ |
| صَدَدَتْ وَطَبَتْ النَّفْسُ يَا قَيْسُ عَنْ عَمْرٍو | ٤- رَأَيْتُكَ لَمَّا أَنْ عَرَفْتَ وَجُوهَنَا |
| شَايِبَ مِثْلَ الْأَرْجَوَانِ عَلَى النَّخْرِ | ٥- رَأَيْتَ دِمَاءً أَسْهَلَتْهَا رِمَاخُنَا |
| عَلَى حَرْجٍ تُؤَسَّى كُلُّوْمُكَ فِي الْخَدْرِ | ٦- وَنَحْنُ حَمَلْنَاكَ الْمَصِيفَةَ كُلَّهَا |
| فَنَحْنُ وَبَيْتِ اللَّهِ أَدْنَى إِلَى عَمْرٍو | ٧- فَلَا تَحْسِبْنَا كَالْعُمُورِ وَجَمْعَنَا |
| بَعِيدَيْنِ مِنْ نَقْصِ الْخَلَائِقِ وَالْعَدْرِ | ٨- جَمِيعًا، وَلَسْنَا، قَدْ عَلِمْتَ، أَشَابَةً |

(87) 訳

- ヤシュクル族の若者らに私の言葉を伝えてくれるのは誰か。“私は耐え忍ぶべき幾多の場面が生ずる時を迎えたのが見える。
- 諸君にシャイバーン族の件で忠告する。すなわち、彼らは偉業をなし、誇るにたる人々である。

- 3- (だが、その族長である) カイス、すなわち、カイス・ブヌ・ハーリドは、「もし、ヤシュクルと遭遇すれば、彼らはナツメヤシの実よりもおいしいだろう」と言ったのだ¹⁾。”と。
- 4- 私は(大言をはいた) お前が我々の顔を見ると、カイスよ、(お前は我々が殺したお前の親友) アムルの復讐のことも気に留めず、逃げたのを見たぞ。
- 5- お前は、我らの槍が土砂降りのように流した血を見た。それは喉元を赤紫色の染料で染めたようであった。
- 6- 我らはお前を襲って重傷を負わせ、婦人部屋のベッドの上で傷を癒すため、夏中、伏せているよう余儀なくしてやった²⁾。
- 7- お前は、我らと我らの仲間をアムルどもと同じと思っではならぬ。我らは、神の館に誓って言うが、バクル(・ブヌ・ワーイル)に(お前達より)近いのだ³⁾。
- 8- 我らすべては、お前が先刻承知のとおり、烏合の衆ではない。我らは、卑しい欺瞞の性質とはかけ離れた部族である。

1) 戦えば、ナツメヤシの実を食べるようにたやすく勝ち戦利品を得る、の意。

2) 4 行ではカイスは逃げたとあるが、実際には両軍は戦い、彼は重傷を受けて撤退したことがわかる。

3) テキストでは ʾadnā ʾilā ʾAmrin (アムルに近い) となっているが、大英博物館写本では「バクルに近い」となっており、これが妥当でアムルでは意味を成さない。すなわち、ヤシュクル族はバクル・ブヌ・ワーイルの直系で純血を保っている、と言ったもの。なお、ウムール (ʾUmūr) は ʾAmr の複数で、ここでは血の復讐を忘れた忠誠心の無い部族のことと解される。神の館とはメッカのカアバ神殿のこと。

—— (88) アルハーリス・ブヌ・ザーリム・アルムッリー ——

الْحَرْثُ بْنُ ظَالِمِ الْمُزَيَّي

まえがき

この人物の作品は No. 88 と No. 89 に載せられているが、ʿaftaku mina l-Hārithi bni Zālimin「アルハーリス・ブヌ・ザーリムよりも残酷な殺害者」という諺の主人公にされているほどだから、ジャーヒリーヤ時代には残酷な殺害者として広く知られていたものであろう。『歌の書』(10, pp. 18-29) には、彼が殺したハーリド・ブヌ・ジャアファル (Khālīd b. Jaʿfar b. Kilāb) の殺害をめぐる伝説が詳しく記録されており、同書 (10, p. 21) にはこの詩とほぼ同じ詩 (この詩は 8 行、同書では 9 行、うち 6 行は同じ) が載っている。この詩人はズブヤーン族の支族ムッラの成員であったが、同じくムッラに属した No. 12 および No. 90 のアルフサイン・ブヌ・アルフマームと家系が異なる。この詩人の祖先はヤルブーウ・ブヌ・ガイズ・ブヌ・ムッラ (Yarbūʿ b. Ghayz b. Murra) である。

詩人が幼少の頃、一家はアーミル・ブヌ・サアサア族のジャアファル・ブヌ・キアーブ (Jaʿfar b. Kilāb) の襲撃を受け、父ザーリムをはじめ一家の者が殺された。このようにして成長後、詩人には復讐の義務が課せられた。彼の二つの詩を理解するためには、6 世紀中葉の中央アラビアの勢力関係の概略をとらえておく必要がある。

6 世紀中葉の初期から南アラブ系キンダ王国の支配権が揺らぎ始めると、王国のマアディーカリブ・ブヌ・アルハーリス・アルキンディー (Maʿdī-Karib b. al-Hārith al-Kindī) の支配下にあった中央アラビアのカイス・ブヌ・アイラーン (Qays b. ʿAylān) 系の諸部族は、アブスの有力な族長ズハイル・ブヌ・ジャジーマ (Zuhayr b. Jadhīma) の指揮下に入った。

彼らはほとんどがガタファーンとハワージンという二大部族連合のいずれかに加わった。前者の中核部族はアブスとズブヤーンであった。後者はそれはサキーフ、アーミル・ブヌ・サアサア、ジュシャム、サアド・ブヌ・バクルおよびヒラルルなどの諸部族であった。ハワージン連合は当初はアブスの族長ズハイル・ブヌ・ジャジーマが率いるガタファーン連合に従属していた。ズハイルはラフム朝の王の支持を得、娘の一人を王家に嫁がせていた。やがて、ハワージン連合はズハイルの強圧的な統制に反発するようになり、ついに、アーミル・ブヌ・サアサア族のハーリド・ブヌ・ジャアファル・ブヌ・キラブ (Khālīd b. Jaʿfar b. Kilāb) がズハイルを暗殺するに到る。このようにしてガタファーンとハワージンは対立して、争うようになった。

しかしガタファーン連合の内部で、すなわち、アブスとズブヤーンの間で、有名な草競馬での不正をめぐるダーヒスの戦いが起こり、ズハイル殺害の復讐戦はお預けとなった。ズハイルの子カイス (Qays) はアブス族のみの支配権を確保して、ダーヒスの戦いで大いに活躍した。

ところで、詩人のムッラー門はズブヤーン族に属するところから、当然、ハワージンとは対立関係にあった。そのハワージン連合では、アブス族のズハイルの殺害者ハーリド・ブヌ・ジャアフアルが指導者になり、ラフム王家の信任をえていた。彼は詩人の父ザーリムなどが殺された（前述）ズブヤーン族の支族ムッラを攻撃する指揮をとっていた。

既に、成人していた詩人はラフム朝の宮殿に王を訪ねた。それは、ラフム朝最後の王アンヌアマーン・アブー・カーブース（605年ごろ退位）であったと伝説は伝えているが、事実はその前任王カーブース（579-573）であったと推測されている。この宮殿で詩人はハーリドと口論し、侮辱的言辞に怒り、王家の庇護を受けていたハーリドが眠っているテントを襲って殺害した。王宮はジワール（*jiwār*「訪問者を庇護する場」）と見なされており、暴力行為は禁止されていた。

この事件は北アラブに衝撃を与え、ラフム朝の追撃を受けることになった殺害者アルハーリスを進んでかくまう者がいなかった。詩人はかくして、無頼放浪の旅を続けるが、ラフム朝の追跡も効果を上げず、彼の女奴隷やラクダや僕を捕まえるにとどまった。詩人はこれに対して新たな復讐をすることになる。

詩人の従兄弟のシナーン・ブヌ・ハーリサ（*Sinān b. Ḥāritha al-Murri*）は詩人の姉妹サルマー（*Salmā*）と結婚していた。

ラフム朝の王はこの一家に、砂漠の清浄な空気のもので育てるべく、王子シュラフビル（*Shurahbil*）を預けていた。アルハーリスはサルマーに会って、彼女の夫シナーンが王子を呼んでいると嘘の誘いをかけて騙し、まんまと王子を荒れ野に連れ出して殺した。No. 88 ではこのことを詠んでいる。また No. 89 ではハーリドの殺害を詠んでいる。

この事件をいつごろのものとするか、手がかりとなるのは570年（預言者が生まれたとされる年）に起こったアーミル・ブヌ・サアサアとタミーム、ズブヤーンおよびアサド連合との間の戦い、シェウブ・ジャバラの戦いである。この戦いでアーミル・ブヌ・サアサア軍を率いたのはハーリドの兄弟アルアフワス（*al-ʿAḥwas*）となっており、ハーリドはこれより前に殺害されていることを示している。

ラフム朝のアンヌアマーン・アブー・カーブースは早くとも580年にならないと王になっていないので、殺された王子がこの王の子とするのは疑わしい。この王の伯父、すなわち、カーブース王を、アブー・カーブースとしているのではないだろうか。タウィール調、8行。

(88) テキスト

قَالَ الْحَرْثُ بْنُ ظَالِمٍ

- 1- قَفَا فَاسْمَعَا أُخْبِرْكُمَا إِذْ سَأَلْتُمَا
 2- فَأَقْسِمُ لَوَلَا مَنْ تَعَرَّضَ ذُونَهُ
 3- حَسِبْتُ أَبَا قَابُوسَ أَنَّكَ سَالِمٌ
 4- فَلِنْ تَكُ أَذْوَادُ أُصْبِنَ وَصِيبِيَّةٍ
 5- عَلَوْتُ بِذِي الْحَيَّاتِ مَفْرَقَ رَأْسِهِ
 6- فَتَكْتُ بِهِ كَمَا فَتَكْتُ بِخَالِدٍ
 7- أُخْصِي حِمَارِ بَاتٍ يَكْدِمُ نَجْمَةً
 8- بَدَأْتُ بِهِدَى ثُمَّ أَتْنَى بِهِدِهِ
- مُحَارِبُ مَوْلَاهُ وَتَكْلَانُ نَادِمٌ
 لَحَالَطُهُ صَافِي الْحَدِيدَةِ صَارِمٌ
 وَلَمَّا تُصِبَ دُلًّا، وَأَنْفُكَ رَاغِمٌ
 فَهَذَا ابْنُ سَلَمَى رَأْسُهُ مُتَفَاقِمٌ
 وَهَلْ يَرْكَبُ الْمَكْرُوهَ إِلَّا الْأَكَارِمُ
 وَكَانَ سِلَاحِي تَجْتَوِيهِ الْجَمَاحِمُ
 أَتَأْكُلُ حِيرَانِي وَجَارِكَ سَالِمٌ
 وَثَالِثَةٌ تَبْيِضُ مِنْهَا الْمَقَادِمُ

(88) 訳

- 止まれ、そして、聞け、両名よ¹⁾。お前たちが尋ねるゆえ伝えてやろう。私こそ従兄弟と戦った男。王は子を殺されて悔やんでいる。
- 誓って言うが、もし、王の前に護衛する者がいなかったなら、澄み切った鋭利な剣で王に襲いかかり、切り捨てていただろう。
- アブ・カーブスよ、お前は無事だと思っていたのか。お前はまだ屈服の憂き目に会ってはいないが、お前の鼻は地面に押し付けられているのだ²⁾。
- (私を懲らしめようとして、王に私の) 数頭のラクダと子供らが捕らえられたとしても、サルマーに養育された王子の首級は(比較にならぬほど) 重大だ。
- 私は毒蛇2匹を彫り刻んだ剣で、王子の脳天を割った³⁾。貴人のみが嫌悪すべきことにいどむのではないか。
- 私はその剣でハーリドを切り殺したように、王子も殺害した。私の武器は人々の頭蓋骨に好まれていない。
- 根無し草を噛んで夜を過ごすロバの辜丸のような王よ。お前が庇護するものは無事

1) 両名とは、王と詩人の従兄弟で王子を預かっていたシナーン (Sinān) のことであろう。

2) 前書き参照。アブー・ウバイドは、王子はアルムンジル三世の子アルアスワド (al-ʿAswad) の子だとしている。しかし、アフマドは、4 行目のサルマーの子というのはアンヌアマーン・ブヌ・アルムンジル (al-Nuʿmān b. al-Mundhir) の王子だとしている。サルマーは、詩人の従兄弟シナーン・ブヌ・ハーリサ (Sinān b. Hāritha) の妻。王子を砂漠の清浄な空気の下で育てるために王子の里親となっていた。

3) 詩人の剣の両面には毒蛇が彫られていた。剣のつかにラクダの腱をまいたマアルーブ (Maʿlūb) という剣も使っていた。ズー・ヌーン (Dhū nūn) という刀には魚が彫られ、マーリク・ブヌ・ズハイル、ハマル・ブヌ・パドル、アルハーリス・ブヌ・ズハイルへと前の持ち主を殺して受け継がれたと言われている。

だのに、お前は私の庇護者を捕らえて食べるのか⁴⁾。

- 8- 私は、これ（ハーリド）を殺し、二番目にこれ（王子）を殺し、三番目には、王よ、お前を殺す。お前の前髪は一撃される恐怖のあまり白くなる。

4) 「まえがき」のとおり、王は詩人の女奴隷やラクダや僕を捕らえた。詩人はこれに対して王子を殺して復讐した。

—— (89) アルハーリス・ブヌ・ザーリム ——

الْحَرْثُ بْنُ ظَالِمٍ

まえがき

この詩の最初の 6 行は、No. 88 と関連したアーミル・ブヌ・サアサア系のバヌー・キラブの族長ハーリド殺害にふれている。4 行目には殺害後の後継族長になったアルアフワスの名があげられている。そのあと、詩人が属するムッラが、ズブヤーン族ではなくクライシュ族の血統につながると主張している。おそらく、アルヒーラのラフム朝王家から追われる身になった詩人が、クライシュに庇護を求めようとしたことがその背景をなしていると考えられる。アルアンバーリーのテキスト (pp. 101-103, No. 12 の詩人 al-Ḥuṣayn b. Humām の項) ではムッラとクライシュとの血縁関係に関する言い伝えが詳しく取り上げられている。以下はその概略である。

アブド・アルウッザー (°Abd al-°Uzzā、後に預言者が °Abd Allāh と改名させた) ブヌ・ガタファーン (b. Ghatafān) の娘にアルバーリダ (al-Bārīda) という者がいて、クライシュの有力な族長ルアイイ・ブヌ・ガーリブ (Lu'ayy b. Ghālib) と結婚し、アウフ (°Awf) という子を生んだ。彼女はルアイイが死ぬと、元の部族のもとに帰り、今度はサアド・ブヌ・ズブヤーン (Sa'd b. Dhubyān) と結婚しサアラバ・ブヌ・サアド (Tha'laba b. Sa'd) を生んだ。サアドが死ぬと、サアラバはアウフと縁を切り、遺産相続から締め出した。このためアウフは困窮したが、ファザーラ・ブヌ・ズブヤーン (Fazāra b. Dhubyān) がたまたま通りかかって家に連れ帰り、娘のヒンドと結婚させた。そのヒンドが生んだのがムッラ、すなわち、詩人アルハーリスの祖先である。

また、第二代カリフのウマルが、ムッラー門がクライシュに協力するなら血縁を認めると提案したが、クライシュの弱小な一員になるよりは、ズブヤーン族の有力者であるほうが良いとして、断ったとも伝えられている。ワーフィル調、23行。

(89) テキスト

وَقَالَ الْحَرْثُ أَيْضًا

- | | |
|--|--|
| تَحْتُ إِلَيْهِمُ الْقُلُوصَ الصَّعَابَا | ١- نَأْتُ سَلَمَى وَأَمْسَتْ فِي عَدُوِّ |
| وَحَلْتُ رَوْضَ بَيْشَةَ فَالرُّبَابَا | ٢- وَحَلَّ النَّعْفَ مِنْ قَنَوَيْنِ أَهْلِي |
| فَجَعْتُ بِخَالِدٍ عَمْدًا كِلَابَا | ٣- وَقَطَّعَ وَصْلَهَا سَيْفِي وَأَيْسَى |
| وَقَدْ غَضِبَا عَلَيَّ فَمَا أَصَابَا | ٤- وَإِنَّ الْأَخْوَصَيْنِ تَوَلَّيَاهَا |
| كَمَا أَكْسُو نِسَاءَهُمَا السَّلَابَا | ٥- عَلَى عَمْدٍ كَسَوْنُهُمَا قُبُوحَا |

- ٦- وَإِنِّي يَوْمَ غَمْرَةٍ غَيْرَ فَخْرٍ
 ٧- فَلَسْتُ بِشَاتِمٍ أَبَدًا قُرَيْشًا
 ٨- فَمَا قَوْمِي بِثَغْلَبَةٍ بَنِ سَعْدٍ
 ٩- وَقَوْمِي، إِن سَأَلْتُ، بَنُو لُؤَيٍّ
 ١٠- سَفَهْنَا بِاتِّبَاعِ بَنِي بَغِيضٍ
 ١١- سَفَاهَةً فَارِطٍ لَّمَّا تَرَوِي
 ١٢- لَعَمْرُكَ إِنَّنِي لَأُحِبُّ كَعْبًا
 ١٣- فَمَا غَطَفَانُ لِي بِأَبٍ وَلَكِنْ
 ١٤- فَلَمَّا أَنْ رَأَيْتُ بَنِي لُؤَيٍّ
 ١٥- رَفَعْتُ الرُّمْحَ إِذْ قَالُوا قُرَيْشُ
 ١٦- صَحِبْتُ شَظِيئَةً مِنْهُمْ بِنَجْدٍ
 ١٧- وَحَشَّ رَوَاحَةَ الْقُرَيْشِيِّ رَحْلِي
 ١٨- فَيَا لِلَّهِ لَمْ أَكْسِبْ أَثَامًا
 ١٩- أَقَامُوا لِلْكَتَائِبِ كُلِّ يَوْمٍ
 ٢٠- فَلَوْ أَنِّي أَشَاءُ لَكُنْتُ مِنْهُمْ
 ٢١- وَلَا قِطْتُ الشَّرْبَةَ كُلَّ يَوْمٍ
 ٢٢- مِيَاهًا مِلْحَةً بِمَبِيتِ سَوْءٍ
 ٢٣- كَأَنَّ التَّاجَ مَعْفُودٌ عَلَيْهِمْ
- تَرَكْتُ التَّهْبَ وَالْأَسْرَى الرَّغَابَا
 مُصِيبًا رَغْمَ ذَلِكَ مَنْ أَصَابَا
 وَلَا بِفَزَارَةٍ الشُّعْرَى رِقَابَا
 بِمَكَّةَ عَلَّمُوا النَّاسَ الضَّرَابَا
 وَتَرَكُ الْأَقْرَبِينَ بِنَا انْتِسَابَا
 هَرَّاقَ الْمَاءِ وَاتَّبَعَ السَّرَابَا
 وَسَامَةً إِخْوَتِي حُبِّي الشَّرَابَا
 لُؤَيٍّ وَالِدِي قَوْلًا صَوَابَا
 عَرَفْتُ الْوُدَّ وَالنَّسَبَ الْقُرَابَا
 وَشَبَّهْتُ الشَّمَائِلَ وَالْقَبَابَا
 تَكُونُ لِمَنْ يُحَارِبُهُمْ عَذَابَا
 بِنَاقَتِهِ وَلَمْ يَنْظُرْ ثَوَابَا
 وَلَمْ أَهْتِكْ لِدَى رَحِمٍ حِجَابَا
 سُيُوفَ الْمَشْرِفِيَّةِ وَالْحِرَابَا
 وَمَا سَيَّرْتُ أَتْبَعَ السَّحَابَا
 أَعْدَى عَنْ مِيَاهِهِمُ الدُّبَابَا
 تَبِيتُ سِقَابُهُمْ صَرْدَى سَعَابَا
 إِذَا وَرَدْتُ لِقَاخَهُمْ شَرَابَا

(89) 訳

- 1) サルマーは遠くへ去り¹⁾、敵の中に住んでいる。お前は（詩人が自身に語っている）処女ラクダを駆り立て彼らのもとへ行く。
- 2) 私の一族はカナワーン山の山腹に住んでおり²⁾、彼女はビーシャとアッルバーブの牧草地に住んでいる。
- 3) 私と彼女との関係を断ち切ったのは私の剣である。私はある意図をもってハーリドを殺し、キラブ族を苦しめた。
- 4) アルアフワスとその息子がキラブの族長となった³⁾。二人はかねてより私に立腹していたが、私という的を射ることができなかった。

1) サルマー (Salmā) は次の2-3行の地名から見て、ハワージン連合の中核部族アーミル・ブヌ・サアサアの支族キラブ (Kilāb) の夫人と思われる。

2) カナワーン (Qanawān) は、アルハージルにそった二つの山でムッラ族の拠点。

3) 双数形 al-ʿAḥwas-ayni 「al-ʿAḥwas と息子 ʿAwf」のこと。アルアンバーリは息子の名はアムル (ʿAmr) としている。似たような例に al-ʿUmar-āni 「Abū Bakr と ʿUmar」、al-Ḥasan-āni 「al-Ḥasan と al-Husayn」がある。

- 5- 私は故意に二人に恥辱の衣を着せ、また、彼らの妻女らには喪服を着せた⁴⁾。
- 6- まことに、ガムラ山での戦いの日、私は自慢しているのではないが、戦利品と多くの捕虜を（他の者達に）残してやった。
- 7- 非難攻撃する者がいようと、私は決してクライシュ族をののしるような事はしない⁵⁾。
- 8- 私の一族はサアラバ・ブヌ・サアドでもないし、首が毛深いファザーラでもない。
- 9- そなたが尋ねるなら（答えよう）、私の一族はメッカのルアイイの子らである。彼らは人々に剣の技を教えている。
- 10- 我らがバヌー・バギードに伴い⁶⁾、血縁で結ばれた近親者を放置したのは愚かなことであつた。
- 11- （バヌー・バギードに従いクライシュを放置しておくことは、）家畜に水を飲ませるために水槽を直そうと先行し、腹いっぱい水を飲むと（あとで来る家畜のことは忘れて）余った水を地面に流し、蜃気楼の後を追うような愚かしいことだ。
- 12- あなたの命に誓って言うが、私は私の兄弟カアブとサーマ兩名を酒を好むがごとく愛している⁷⁾。
- 13- ガタファーンは私の父ではない。しかし、ルアイイこそ真実、私の生みの親である。
- 14- ルアイイの子らを見たとき、私は近い血縁で結ばれていることを悟った。
- 15- 彼らが“クライシュ”と叫んだとき、私は槍を掲げた⁸⁾。私は（彼らの）気質と皮製のテントに住む（高貴さが）私のそれらと似通っていると感じた。
- 16- 私は彼らのある集団とナジュドで行動を共にしたが⁹⁾、彼らと戦う者にとっては、それは苦痛の種であつた。
- 17- クライシュ族のラーワーハは私の鞍を彼の雌ラクダに乗せてくれたが¹⁰⁾、いかなる対価も当てにできなかった。
- 18- 神に誓って言う、私は罪をまねくようなまねはしていない。また、婦人のベールを裂くようなことも断じてしていない。
- 19- 毎日、彼らは敵軍に対してアルマシュラフ産の剣と投槍で立ち向かった¹¹⁾。
- 20- もし私が望むなら、彼ら（クライシュ）の仲間に加わっていただろう。（そうすれば、牧草を求めて）雲のあとを追う荒野の旅はしなかったであろう¹²⁾。
- 21- また、毎日、彼らの水場でハエを追っ払いながら、アッシャラッバで暑い夏を過ごすこともなかったろう¹³⁾。

4) おそらくこの戦いは、4-5行でのキラーブ族との戦いであろう。

5) 「まえがき」参照。

6) バギード (Baghīd) とは Baghīd b. Rayth b. Ghatafān のこと。「近親者」とはクライシュのこと。

7) カアブ (Ka'b) およびサーマ (Sāma) は、いずれもクライシュのルアイイの子。つまり、詩人の異母兄弟。

8) 「槍をかかげる」とは、対立が解け武器が無用になったことを表す挨拶の仕方。

9) 「彼らのある集団」とは、19行と合わせてみるとムッラ族をさしているようだ。

10) クライシュは結局、詩人の保護を拒んだようだが、ジュマフ (Jumah) 家のラワハ (Rawaha) という男が、北へ急ぎ逃げる詩人に雌ラクダを与えた。この一行は23行の次行が適切。

11) ムッラ族の勇敢さを述べたもので、16行の後に置かれるのが順当。

12) クライシュの庇護を受けていれば都市で安楽に暮らせたのだが、苦しい砂漠の生活を余儀なくされたと言っている。

13) アッシャラバ (al-Sharaba) はガタファーン族の水場。ここでハエと言っているが、明らかに敵

- 22- 塩分を含んだ水が、悪い環境の野営地にあり、彼らのラクダの子らは寒さの中で飢えに苦しみながら夜を過ごす¹⁴⁾。
- 23- やせ細った乳母ラクダが水場にやってくる時、彼らの頭上にはまるで王冠が結ばれているようだった¹⁵⁾。

のこと。

14) *miyāh-an* と対格になっているが、主格での読み方もある。

15) ここで「彼ら」とはムッラをさし、水が足りていたようで、水を求める者には彼らの顔が王者のように輝いていた、と詠んだものらしい。

—— (90) アルフサイン・ブヌ・アルフマーム・アルムツリー ——

الْحُصَيْنُ بْنُ الْحُمَامِ الْمُرِّيَّ

まえがき

この詩人は既に No. 12 で紹介した。

アルアンバーリーのテキストでは fa-qāla fī dhālika al-Ḥuṣayn ... 「アルフサインはそれについて言った」という表題がついている。「それについて」とは、同詩人による No. 12 の詩で詠まれている事件のことである。すなわち、ズブヤーン系の支族ムッラの子サフムとシルマの兄弟両家の争いのことである。両家にはそれぞれ援軍が加わり、ダーラト・マウドゥーウというところで戦闘が行われ、詩人が指揮するサフム家側が勝った。これは「フラカ al-Ḥuraqa の戦い」の名で知られている。アルアンバーリーのテキスト (pp. 103-104) および No. 12 「まえがき」参照。この詩人の詩はこのように No. 12 と No. 90 の2編がこの詩集に載っている。タウィール調、12行。

(90) テキスト

وَقَالَ الْحُصَيْنُ بْنُ الْحُمَامِ الْمُرِّيَّ

- | | |
|---|---|
| دَرُوا مَوْلَيْنَا مِنْ قُضَاعَةٍ يَذْهَبَا | ١- يَا أَخَوَيْنَا مِنْ أَيْبِنَا وَأُمْنَا |
| فَلَا تُغْلِقُونَا مَا كَرِهْنَا فَنَعْضَبَا | ٢- فَإِنْ أَنْتُمْ لَمْ تَفْعَلُوا لَا أَبَا لَكُمْ |
| لَنَا نَسَبًا عَنْهُمْ وَلَا مُتَنَسِّبَا | ٣- وَنَحْنُ بَنُو سَهْمِ بْنِ مُرَّةٍ لَمْ نَجِدْ |
| وَلَنْ تَجِدُونَا لِلْفَوَاحِشِ أَقْرَبَا | ٤- مَتَى نَنْتَسِبُ تَلَقُّوا أَبَانَا أَبَاكُمْ |
| وَأَنْ كَانَ يَوْمًا ذَا كَوَاكِبٍ أَشْهَبَا | ٥- وَلَمَّا رَأَيْتُ الصَّبْرَ لَيْسَ بِنَافِعِي |
| فَلَا لَكُمْ أُمَّا دَعُونَا وَلَا أَبَا | ٦- شَدَدْنَا عَلَيْهِمْ ثُمَّ بِالْجَوِّ شَدَّةٌ |
| وَأَسْمَرَ عَرَّاصِ الْمَهْرَةِ أَزْقَبَا | ٧- بِكُلِّ رُقَاقٍ الشَّفَرَتَيْنِ مُهَنَّدِ |
| وَلَكِنْ رَأَوْا صِرْفًا مِنَ الْمَوْتِ أَصْهَبَا | ٨- فَمَا فَرَعُوا إِذْ خَالَطَ الْقَوْمُ أَهْلَهُمْ |
| إِلَيْنَا بِأَلْفٍ حَارِدٍ قَدْ تَكَشَّبَا | ٩- وَلَا غَرَوْ إِلَّا حِينَ جَاءَتْ مُحَارِبُ |
| أَتَغْلَبُ قَدْ جِئْتُمْ بِنِكَرَاءٍ تُغْلَبَا | ١٠- مَوَالِي مَوَالِينَا لِيَسْبُوا نِسَاءَنَا |
| تَفَاقَدْتُمْ لَمْ تَذْهَبُوا الْعَامَ مَذْهَبَا | ١١- وَقُلْتُ لَهُمْ: يَا آلَ دُبْيَانَ مَا لَكُمْ |
| فَأَصْبَحَ مَوْضُوعٌ بِذَلِكَ مُلْتَبَا | ١٢- تَدَاعَى إِلَى شَرِّ الْفَعَالِ سَرَاتُهَا |

(90) 訳

- 1- 父母を共にする我ら兄弟兩名よ、クダーア族の庇護民兩名を立ち去らせよ¹⁾。
- 2- もし、お前達が（私の言いつけに）従わないなら — お前たちは呪われよ — 我らに忌まわしい（戦争という）重荷をおわすな²⁾。さもなければ、我らは怒るであろう。
- 3- すなわち、我らはサフム・ブヌ・ムッラの子らであるからだ。我らのみがその血統につながるものであり、他のいかなる者も我らの血を引くという者は見出せない。
- 4- 我らが家系をたどれば、お前たちは我らの父がお前たちの父であることを知るであろう。また、我らは非道な（言葉をお前たちに投げかけるような）者でないときつと知るであろう。
- 5- 私は忍耐が無益に終わり、戦塵で昼間も暗くなり、星が見えた日³⁾、
- 6- 我らはアルジャウウで彼らを強襲した。“お前たちは母なし、父なしとなれ”と我らは呪った⁴⁾。
- 7- （我らが手にする）剣の両刃は薄く鋭いインド鉄製で、槍は褐色で扱くとよく震え、ライオンの首のように頑強である。
- 8- わが軍勢が彼らの兵らに襲い掛かったとき、彼らは恐れるのではなく、ただ、赤褐色の死の苦杯を見つめるのみであった⁵⁾。
- 9- （両家の争いは）驚くに値しない。だが、ムハーリブが1000騎の軍団を擁して我らを攻め寄せてくるとなると、話は別だ⁶⁾。
- 10- 彼ら（ムハーリブ）は我らの庇護民に庇護された卑賤の者どもだ。その彼らが我らの妻女を捕らえるために寄せてきたのだ。おお、サアラバよ、お前はまことに忌むべき災厄をもたらしたぞ、サアラバよ⁷⁾。
- 11- 私は彼らに告げた、“おお、ズブヤーン家の者どもよ、一体どうしたのか、お前たちはくたばればよい。今年はいつものように（大胆に）振舞わないとは⁸⁾。
- 12- 彼らの首領たちは互いに悪行へと競い合い、マウドゥーウがそれを犯す場所と決められた⁹⁾。

1) 1 - 4行では詩人が兄弟両家の間の流血を避けるため、シルマ家に命じた言葉であろうが、事件の顛末の部分が欠けている。だが、シルマー門はこれを受け入れず、戦いを始めた。5 行以下は戦争について述べている。

2) *lā abā la-kum* 「お前達は父なし子」は呪いの言葉。

3) No. 12, 4 行にこれとよく似たことが述べられている。そこでは、*al-ṣabr* (忍耐) が *al-wudd* (愛情) に、*aṣḥhaba* (灰色) が *muzlima* (闇になる) となっている。

4) 「母なし、父なしとなれ」は呪い言葉。

5) *ṣirf* は「混ざりけのない（ブドウ酒）」、*aṣḥab* は「赤または赤褐色」、つまり「死の酒」の比喻。

6) ムハーリブ (*Muḥārib*) は、ハサファ・ブヌ・カイス・ブヌ・アイラーン (*Khaṣafa b. Qays b. ʿAylān*) の子孫とされ、ハワージンと同盟関係にあった。これらが戦闘に加わるとムッラ族の分裂につながると、警告している。

7) サアラバとは、サアラバ・ブヌ・サアド (*Thaʿlaba b. Saʿd*) のことで、サアドは詩人の祖先でもある。つまり、サアラバはズブヤーン族の別家系の者で、ムハーリブを詩人の敵方に誘った。

8) この行は No. 12, 25行と同じ事を述べたものと思われるが、そちらでは *lā tuqdimūna muqaddamā* 「大胆に進撃しない」とある。*tafāqad-tum* は「死んでしまえ」の意で、呪い言葉。

9) No. 12 では、マウドゥーウまたはダーラト・マウドゥーウという場所で戦闘があり、詩人が率いる軍が、多数を擁する敵の連合軍を撃破したとある。